郷土誌

ふるさと龍野

創刊号

龍野

うすくち龍野醤油資料館別館（上霞城）

大正13年建築。ルネッサンス風で、木造タイル張り2階建、ポーチや一部を石造りとする。

※表紙写真：うすくち龍野醤油資料館からヒガシマル醤油元本社工場を望む。

うすくち龍野醤油資料館（大手）

昭和7年建替え。煉瓦造りの外観はセセッション風を加味したルネッサンス様式である。

設計者は、いずれも不詳であるが、満田家住宅・竹内家住宅とともに、水谷幾蔵の施工といわれている。

参考資料：龍野市『龍野の建築』
川島智生「醸造家と建築⑭」（『醸界春秋38』）

表紙題字：淺井良平
表紙写真：長坂泰成

郷土誌「ふるさと龍野」の発刊に際して

「ふるさと」は、まずは自分が生まれた地といえるでしょう。そしてさらに、第二のふるさと、第三のふるさとともいわれるように、住んだことがある地、なじみ深い地という意味もあります。

そのような「ふるさと」という言葉がもつ響きの中には、その地への「なつかしさ」がこもっています。この「なつかしさ」は、その自然のなかで、その町に住み、ともに暮らす人々との関わりが染みこませたものともいえます。しかもそれは生活の中で受け継がれつつ、「ふるさと」のたたずまいをつくっていきます。

鶏籠山や台山、そして揖保川が自然の美しさを感じさせてくれる「龍野」はまた、そこで営まれてきた生活、そして文化によって、そこに住む人々だけではなく、そこを訪れる人々にも、なつかしさが感じられる「まち」をつくってきました。

しかし、多くの「ふるさと」がそうであるように、龍野もまた、大きく変わろうとしています。

ただ失われていくものへの愛惜の念からだけではなく、そこで営まれてきた生活や文化を継承しつつ、さらに新しい生活文化を創造すること、たとえば少子高齢社会の進展という社会の変化に対応したまちづくりが期待されています。

私たちは、龍野が誰にとっても「なつかしい」まちであり続けること、そしてその「なつかしい」想いのうえに誰にとっても住みやすいまちづくりが進められることを願って、郷土誌「ふるさと龍野」を発刊することといたしました。

なにとぞ、ご支援くださいますようお願い申し上げます。

（室井美千博）

目次

龍野を語る・人を語る

龍野の醤油と私—淺井良平氏に聞く ……2

龍野を想う（一） ……前田陽一……12

〝たつの〟地名の1300年 ……岸本道昭……15

龍野をえがく

龍野を彫る—乾太氏に聞く（第一回） ……19

三木露風研究　作品の故郷を歩く（一） ……和田典子……25

紹介　薄田泣菫「揖保川にて」 ……30

龍野に生きる

龍野芸者—龍野全盛の頃 ……32

たつの　浦川・十文字川抒情 ……臼井洋志……34

龍野の藍染 ……臼井洋志……37

龍野の歩み

歴史探訪（一）　神々の水争い ……岸本道昭……40

評伝 三木露風「写真この一枚」（一）生家と母カタ　和田典子……42

龍野を歩く

「寅次郎夕やけ小焼け」の思い出 ……榮藤　孝……45

震災と町並み ……長坂泰成……47

龍野を歩こう（1）—龍野観光コース ……49

龍野に住まう

「日山ごはん」 ……宮崎宏興……51

龍野を語る・人を語る

◎龍野の醤油と私―淺井良平氏に聞く

◎龍野を想う（一）

◎〝たつの〟地名の１３００年

「龍野の醤油と私」

ヒガシマル醤油株式会社　取締役相談役　浅井良平氏に聞く

―今日は、龍野の醤油との関わりを軸にしながら、ふるさと龍野について、お話をお伺いしたいと思います。

龍野の醤油

―龍野の醤油の起源は相当古いようですね。

浅井　そうです。禅を学ぶために中国の宋へ行った、覚心[1]という坊さんが味噌の作り方をおぼえて帰ってきましてね、姫路の東光寺を拠点に布教しながら味噌造りを伝えて、今で言う味噌のたれを作って以来と聞いています[2]。

①覚心（法灯国師一二〇七―九八）は臨済宗の僧。一二四九年入宋、五四年帰国。

②その覚心から約三〇〇年後、信長や秀吉に追われて勢力を失った赤松一族の家臣たちが龍野で醸造業を始めたとされるが、その頃には一般の家でも醤油の醸造は行われていたと考えられる。その後、龍野醤油は江戸時代を通して、京都にも進出、龍野醤油の偽物が出回るほど発展。

―龍野の醤油醸造は醤油だけでなく、酒も作っていたようですが。

浅井　お酒を造りながら、醤油を作っていたことは私も聞いています。

浅井は比較的、醸造業を始めるのが遅いんですよ。その前には、下川原筋[3]でもたくさんあったと聞いています。

私の下川原の家も、もとの玄関は下川原の商店街の方にあって、その場所は以前からあった井戸を境にして、商店街側の土地は売ってしまいましたが、その井戸は大きくて、醸造をやっていた名残りではなかったかと思います。

―あそこで醤油の醸造がされていたという話はすごいですね。そのようなことはあまり聞いたことがありませんでしたから。

浅井　町の様子は変わっていきよりますからね。

③下川原筋の醸造業

一八三〇（文政一三）年の株改めによる文書によれば、当時龍野には「上積醤油屋」と「地売醤油屋」との二組の醤油屋仲間があり、上積醤油屋一一名のうち下川原町には、次の四名の醤油屋があった（［　］内は造石高）。

（『龍野市史』第二巻　一九八一年）

筋原屋宗八　［四一七石］
赤穂屋宗兵衛［二九九石］
姫路屋繁蔵　［一五〇石］
二塚屋重次郎［八〇石］

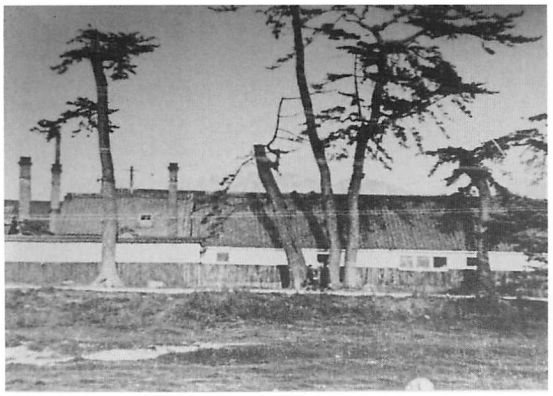
因みに地売醤油屋一四名のうちには三名の醤油屋の名がある。

淺井醤油・ヒガシマル醤油の始まり

―それでは淺井家が醤油醸造に携わるようになったころのことをお聞きしたいのですが、まず藩の「物産蔵」というのがあって……。

淺井　そう、藩に「物産蔵」があって、その蔵の払い下げを受けたのが淺井醤油の始まりです。明治二年のことですね。

物産蔵は、川の東にあって東蔵とよばれていたようで、それと東から丸い太陽が昇るように社運隆盛を願って商標を㊥（ヒガシマル）としたということです。



淺井家の醤油蔵

―その淺井家の屋号が因幡屋……。

淺井　なんかね、うちは因幡から来たというように小さい頃から聞いているんですが、書いたものが何にもない。とくにうちは新宅ですから。

―そう言い伝えられているけれど、確かな書かれたものはうちにはないということなんですね。

淺井　そう、うちにはありませんけれど本家へ行くとかすれば、何かあるかも知れませんが、実際のところ捜すのはちょっと難しいとは思います。

―ところで、淺井家はここで初めて醤油造りに関わるということですね。

淺井　そうです。

―そうするとその前はどういう商いをされていたのですか。

淺井　これも文献はないんですが、薪や炭、そういったものを商いよったのと違いますかね。

―それで揖保川の東に工場を持つことになって、一方では川西で菊屋さんとかが続いているわけなんですが、明治時代には会社組織になってくるんですね。菊屋さんの合資、淺井さんのところの合名のような。

淺井　そう。合名とか合資とか。株式はあまり聞いたことがないです。合名の方が責任は重いですがね。代表社員になったら無限責任を負うということになりますからね。

―その淺井さんのところは明治二九年に二代彌兵衛、初代彌七兄弟が二人で資金四万円の淺井醤油合名会社を設立ということですね。初代の彌兵衛さんが物産蔵を買われて、この二代彌兵衛さんは、初代のご長男で、彌七さんが……。

淺井　私のおじいさん。

―そして関三さん、良平さんと続くわけですね。

淺井　ただ彌兵衛さんは相談役としておられましたけど、会社にはあまり出社されず、龍野銀行ですね、それに関わっておられました。あのころは小さい銀行、掘銀行があったりいろいろあったんですね。その龍野銀行の建物は菊一の前の、今の醤油資料館の前に……

―県信連があったところですね。県信連の前が龍野銀行。

淺井　そうそう、県信連があったところです。

醤油とのかかわり

―それではご自身の醤油との関わりをお聞きしたいと思います。

淺井　これはまず、醤油とのかかわりという

より、その工場との関わりということになります。小学校三、四年生の頃、親父と、そう関三とですね、日曜日に工場へ遊びに行って昼ご飯を日曜勤務の社員二、三名と食べ、麦飯でおいしかったのを憶えています。

また、会社の事務所の二階には会議机があって、よくピンポンをして楽しんだりもしよりましたけど、小学校五、六年生になると勉強が厳しくなり、会社へは遊びに行かなくなりましたね。

そういえば会社では毎年、暮れの一二月二八日に餅つきをして、会社の分と家の分も一緒についてくれていました。その日は餅、そうあんころ餅ですね、それを食べに行くのが楽しみだったりしたものです。

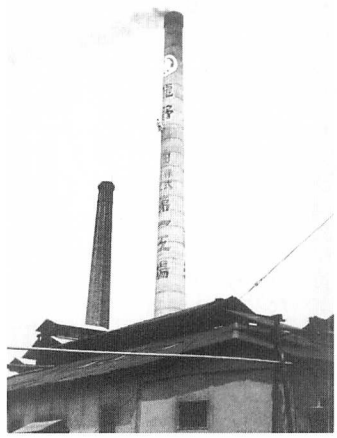
―他に工場の様子などについてはどうでした。

淺井　工場ではトロッコは見たけれど、それで遊んだ記憶はないですね。

また、昔、工場には風呂があって、麹造りを終えた社員が入っていました。

それから、親父は一日一回必ず工場を回ることを習慣にしてましたので、石炭が散らばっていたり、縄が落ちていると必ず自分で片付けよりました。そのうち親父が工場に入ると伝令が飛んで、皆がきれいに片付けるようになりました（笑）。中学一年生の頃は後ろをついて回っていたので、そういう光景はよく目にしたものです。

こんなこともありましたね。工場の煙突なんですけど、当初四五ｍありました。あとで三九ｍに縮められたんですが、この煙突は会社のシンボルでした。



45ｍの煙突

親父関三が大学卒業後、キッコーマンへ見学に行き、社業発展の根幹が最新設備にあることを実感して、建てたものです。

その煙突が建った時、関三百らが煙突に登ったんだけど、降りるときに足がすくんで降りられず（笑）、蔵人が助けに来てくれてやっと降りられたというエピソードがありましてね。

―いや、笑いごとではないですね。普通は途中で怖くなって登り切れないものでしょう。よほどの思い入れが煙突にあられたんでしょうね。

淺井　そうだと思います。そうでなければ、なかなか登ろうとはせんでしょうからね。

他に工場の様子ということでは会社の蔵には、砂糖蔵があって、その横に大豆を搾って大豆油を作るというような蔵もありました。

―ちょっと立ち止まるようなことにもなるんですが、中学校時代から、直接醤油造りにかかわられるまでのお話も挟んでいきたいのですが……。

淺井　私らの一年の時はまともに勉強しましたけど、残念ながら、二年の時は勤労奉仕で農家へ行って。力にはならへんのですけど。それから三年から終戦まで、そう四年の八月まで、東芝の余部工場におりました。だからほとんど勉強はしていないんで、もちろん全員ね。

それで四年の後半と五年で勉強ということなんですが、ところが火事がありましたので、校舎がなくなって、そう四年の時、二回もあったんです。

―これは有名な「事件」ですが……放火といわれたりして。

淺井　らしいね。全員警察へ行きました僕ら

も行きましたし、先生も行きましたけど、結局、分からずじまいでした。

―夜中の火事だったんですか。

淺井　そう、二時頃だったと思う。

―試験の前の日で。

淺井　試験の前の日やから勉強してました。僕は徹夜するのは嫌いだったから、二時頃、寝る前だったかな、それで火事だと学校へとんで行きました。で、終戦後は上級生として巡回しましたが、多くの生徒がいた寄宿舎もまともな食料がない状態で、ある時、火の気が見えるので入っていったら、畑で大根やら芋をとってきて食べよるんです。それをとにかく見逃してくれということで、大根をくれるんやけど、もらわずにやり過ごすことも有りました。やっぱり多少風紀が乱れていましたね。

―そういう時代だったんですね。

淺井　そうですね。僕らが動員されている間はちょっと軍隊がおりましてね。それで下川原の僕の家に副官が泊まっていて、落合中将という一番えらい人は聚遠亭にいました。本土上陸に備えての軍隊④だということだけど、武器なんかもいいもの持っていない、そんな様子を見よったらあんまり戦況がいいことないのは分かりましたね。

④一九四五（昭和二〇）年五月、本土決戦に備えて、陸軍第二二五師団が編制され、その工兵中隊、輜重中隊、通信小隊が龍野に駐屯したという。

『龍野高等学校百年史』（百年史編集委員会 一九九七年）には、次のようにその様子が記されている。

「龍野中学校に駐屯した通信小隊は西側の建物を利用し、西側の崖に防空壕を掘って兵器を隠していた。

兵士の半数近くが丸腰で、馬五頭ほどいたが訓練らしいことはしておらず、一～三年生の目にも急造の部隊と分かった。」

―しかし、とにかく勉強して、進学をということになりますね。

淺井　私はね、三高かあるいは姫路高校かへ、当時のことですから、行こうかなと思うていたんです。話をしようと長うなりますけど、ただ終戦後のあの頃は教科書がないので、参考書がなかったら何にも勉強できへんかったです。それを持っている者は龍野に一人か二人しかいない状態でした。それで私はいとこのところへ電話したら、「僕が勉強したときの参考書だったら納屋にあると思うで」と言われ、見に行くと宝の山がありまして、数学は岩切の数学、英語は誰のだったか、参考書のいいのが見つかりました。それを持って帰り、受験を目の前に遅れをとり戻すため、学校を休んで朝から晩まで勉強して頑張っとったんです。ところがおばあさんにそれを言うのを忘れとったら、友達が病気と思うて見舞いに来て、おばあさんがほんまのことを全部しゃべって（笑）。それがまた、見舞いに来た友達のお父さんが中学校の先生だったんで、全部ばれてしもうて（笑）。今は懐かしい思い出です。

―それは大変でしたね。

淺井　その時の先生がね、私が高等学校を受ける時から新しい問題が出るから、おまえ見てこい、受験料は出してやると受験料だけくれました。それで一番試験の早い学校が私立の甲南高校だったので、別に行きたいとは思わなかったけど、指名やから行かざるをえんかったんで受験したんです。そしたら難しい問題が出ましてね。それでほんとに入る気ないから、地理や歴史はいい加減に書いて、数学だけちょっと試しに最後までやってみようかと。だけど難しかって三分の一ほども書いていなかったと思うんやけども……合格通知が来て。僕はやめようと思ったんですが、北野中学とか神戸一中とかの連中も来てまして、その連中が「あんた、馬鹿にしてるか知らんけど、ええ学校やで、来てみたら分かる」と

いうもんやから。そんなことで甲南に行くことになったんです。

―そうするとやはり下宿して。

淺井　この旧制甲南高校時代は、藤綱幸二さん、この方は西栗栖の出身で関三の一級下で、本山の助役をされていて、終戦後、公職追放にあったんですが、その家に下宿していました。おじさんが職を失ったんで、おばさんが急遽洋裁を始め、家計を支えていました。当時は、配給の椰子油や外米しかなく、とてもまずかったし、食糧不足でした。あの闇米を買わないということで裁判官が餓死したというようなことがあった時代です。

―下宿するものも下宿させる方も大変な状況ですよね。

淺井　そんなことやから、高校三年生の時にね、栄養失調のような状態になってしもうて、それで藤綱さんの近所の平尾先生に、この方は阪大の出身で、奥さんが新宮の出身だったんですが、診てもらい、阪大の眼科にも行きました。

体がそんな状態だったので、行きたい大学もあったんですが、平尾先生と相談して勉強より静養を優先させ、広島大学に行きました。やっぱり親の跡を継ごう思ったら、発酵工学に是非にと思うて行きました。

―大学卒業後はすぐにヒガシマルに。

淺井　いやそれがね、「株式会社弥谷」という問屋さんへ修業に行ってこいと言われましてね。

結局二年間、「弥谷」という大阪にある、うちの有力問屋さんのところへ行きました。ええ、「弥谷」には昭和二九年の入社です。

それでそこの辻内社長に命じられて、会社の改善や業界の将来像について論文を書いて出せということで出して、それは社内で結構反響を呼んだりしました。

最初の一年間は、倉庫で荷物を担いでましたが、とても重たかったですよ。今と違うて、当時は、酒は杉の木箱で一升瓶一〇本入でまだ軽いけど、醤油は松の木箱で二L瓶一〇本入でガラスも分厚いし、それから小樽は持てますけども、大樽は僕らではビクとも動いてくれなんで、あれはやっぱり専門のひとやないと担げませんね。

―大樽というのは四斗ですか。

淺井　そう、四斗。そこでは、朝七時頃に行って、前の日の在庫を本社の発注するところへ報告して、そして晩は配達が完了するまでやから、在庫数を計って一つでも間違いがあったら九時、九時半ぐらいまではかかりよったですね。それでうどん屋のうどんくらいは食べさせてもらってましたけどね。

後の一年は小売店に出向いてセールスのまねごとをしたり、市場はどんなものが売れているか、調査いうたら大げさですけど、そういうことをやってました。辻内社長の息子とは仲がよくて、一緒に小売店を回たりしよりました。

―そしてニ年してヒガシマルに、この当時は龍野醤油入社にということですね。

淺井　そう昭和三一年一月三一日に「弥谷」をやめて、昭和三一年六月一日に龍野醤油に入ってますね。

小樽と大樽

それでね、当時、大卒の技術者を親父がとってきてましたので、その時淺井博さんは副社長でここは企画とか、広告、人事なんかをもってましたが、「君は技術の専門だけども、労務的な人間がいないんで、技術をやめて労務のほうでやったらどうだ」と言われて、人事・厚生・総務の方をやるようになりました。

―醤油との関わりが製造あるいは製造技術の面ではなく、会社組織の運営面からになるわけですね。

淺井　そうですね。はじめは、本社工場に配属となって、工場事務で給与の計算などやって、三二年一月に業務部に異動し、昭和三三年に第一工場で労務主任となりましたけど、あの頃はもう一年もたたんうちによく異動しています。

そのあと昭和三八年に淺井博さんが社長になるんですが、その時に僕が総務部人事厚生課課長となって、博さんが担当しておった人事の仕事を受け継いでやるということになりました。いろいろな苦労はあったんですが、その頃のことで、本社工場と第二工場の工務員を全員第一工場へ異動させるということがあったんです。

その当時は、旧菊一の社員⑤の現場の方は一生ここで、菊一の工場で働いてここでやめていきたいという思いをもたれていたもんですから、相当反発もありました。

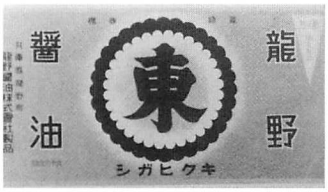
しかしまあ、ひどいケンカもなしに生産体制の改善、社内融和の促進という必要性を時間をかけて説明し、職長、これは後に組長という名称になるんですけど、その大塚・西口・井原・藤井・舟引さんらを説得し、第一工場に行ってもらうようになりました。

融和の促進ということでは、バレーボールだとか、後ではボーリング大会なども入れましたね。

⑤旧菊一の社員―淺井醤油と菊一醤油との合併

戦時体制が進展する中で、原料配給が商工省によって直接割り当てられる政府直轄指定会社になるべく、昭和一六年に龍野の醤油会社の合併が企図とされたが、他社は加わらず、淺井醤油と菊一醤油とが合併することになり、昭和一七年龍野醤油株式会社が設立された（生産量の不足から政府直轄指定会社にはなれず）。

商標は、それぞれの「㊟」と「菊一」マークを残しながら、「菊東」とされた（昭和二四年に有力なブランド名の「㊟」に統一）。



商標キクヒガシ

―この時期は醤油だけではなく、いろいろ商品を出されていますね。

淺井　この少し前の昭和三九年に会社名を「龍野醤油株式会社」から「ヒガシマル醤油株式会社」にしたんですが、この年に醤油の出荷量は二〇万石を超えます。といってもちょっと分かりにくいと思うんですが、一石は一八〇㌔㍑で、合併当時の昭和一七年は三万石、その一〇年後の二七年で六万石、三六年で一五万石、その三九年に二〇万石、それから四七年には三〇万石と、どんどん増えています。

一方で、その三九年からは「うどんスープ」「ラーメンスープ」を作って、翌年には「ヒガシマル食品株式会社」もできるんですね。昭和五四年には「ちょっとどんぶり」、そのあと「ちょっとぞうすい」とかね。

それでこういうこととは別に、ちょっとおもしろいのは、昭和四二年の社員旅行で新幹線を貸し切ったんだけど、それ日本で二番目でね。

―それからいよいよ会社経営の面からの龍野の醤油との関わりということですね。

淺井　そうですね。昭和四〇年に製造部長をしながら、総務部の仕事をして、昭和四一年に取締役、昭和四三年に総務部長になりました。

―昭和四一年といいますと、取締役になられたのは三七歳ですか、四月だと三六歳でしょうか。

淺井　そう、そうです。その時、片岡明さんと一緒にね、その日言われてびっくりしたんですよ。その日、株主総会で、皆さんの前で挨拶せい、と言われてね。

―このころの経営陣といいますと。

淺井　社長は淺井博さん、弥七郎さんが専務で、常務が勝間馨さんという方、親父関三は三年前から相談役で、片岡歓次郎さんがこの時、取締役会長から取締役相談役になっておられますね。

―そしてご自身はこの後……。

淺井　それから昭和四六年に常務取締役で、昭和四九年に製造・業務担当として業務部長、それで昭和五三年に専務取締役（製造・業務担当）となって、平成二年に代表取締役副社長になりました

―そして社長として仕事をされることになりますが。

淺井　社長になったのは平成八年三月二八日で、それで三期六年勤めることになります。

社長時代もいろいろあるんですが、大きな改革のひとつに物流の改善があります。

それまでは、古くから―私らが入ったときから大阪ではトキワなどの倉庫兼運送会社、京都では大阪容器京都支店の運送・倉庫、神戸では神戸容器運送部・倉庫のように、その地域地域でいろいろな出先倉庫、輸送部門があって別々でやっていましたが、それをやめましてね。ただ古くから付き合いのあるところでしたんで、これらの取引先には、こちらの合理化の意向を理解していただくのに心を込めて折衝しまして、なんとかその仕事を成し遂げたんだけど、実際誰もが尻込みしたくなる課題でもありましてね、私自身でやりました。

だけど、第一工場に物流倉庫を建て一箇所の広い場所へピッキング作業を集約して、トラック業者も一新したりして結局、この改善によって年間五億円の物流費を削減することができたんです。

それと、工場を建てることは、片岡さんの時に一つ建てるのに協力はしましたけど、私自身は大きなのは建てずですね。ほかに、大型の機械に換えるとかそういう改善はいろいろいたしましたけど。

―そうした成果が―。

淺井　そう、社長任期中は、売り上げは過去最高の二一七億円を達成しまして、経常利益も八～一〇億円の間で推移してましたから、まあよかったですね。ちなみに現在は五～八億円といったところです。

人々との出会い

―龍野で生まれ育たれたなかで、出会われた人たちのことをお願いします。

淺井　まずこれは出会いというよりも、思い出ということになると思うんですが、横山醇[6]という女医さんが龍野におられましたね。

いつも黒一色の、といっても夏はグレー一色のということになりますけど、カラーのついた服を着ておられて、子どもの頃に風邪を引くと往診をしてもらってました。診療所は、現在の相生さんの家の道を挟んで西隣、今は空き地になってますけど、そこにあったと思います。

⑥横山醇（一八七三～一九五九）
父は横山省三（一八四九～一九一〇）
一八八〇《明治一三》年結成の龍野醤油醸造組合初代組合長）。同志社女学校卒業後済生学舎で学び、一八九八《明治三一》年県下初の女医として開業。（「楽とんぼ」第四三号～第四六号）

それから前田陽一[7]さんね、随分と有名になられた人ですけど、小学校の頃、下川原の喫茶店横の細い道に駄菓子屋があって、そこ

はお好み焼きも売ってましてね、そこでよく見かけました。喫茶店の前が前田陽一さんの家で、大きな新聞販売店でした。

彼は松竹に入って、ご存じのように喜劇映画を撮っておられましたけど、会社のPR用映画としてね、「龍野の四季と淡口醤油」というのを、制作費は一五〇万円で、一年かけて撮影もらったこともあるんですよ。

⑦前田陽一（一九三二～一九九八）

一九五八（昭和三三）年松竹に入社。

一九六四年「にっぽん・ぱらだいす」で監督デビュー。

俳句の加藤三七子[8]さんは、照子という私の姉の同級生でして、本が好きでよく下川原の関三の家へ来て本を読んでおられました。高砂で「黄鐘（おおじき・俳句誌）」を発行された後も「良平さん、良平さん」と言って会社にもよく来られ、俳句の色紙をいただいたりしました

⑧加藤三七子（一九二五～二〇〇五）

「黄鐘」を主宰、句集『臘銀集』で一九九九《平成一一》年俳人協会賞受賞。

一高寮歌の「春爛漫」や「嗚呼玉杯に」の作詞者として有名な矢野勘治[9]さんね、私は親しいはなかったんですが、親父が親しかったものでね。

矢野勘治

⑨矢野勘治（一八八八～一九六一）

一九五九《昭和三四》年「龍野名誉市民」の称号を受ける。

この方は、「三木定」の三木定七の二男で矢野家に養子に入ったんですが、一高、東大を出て横浜正金銀行、現在の三菱東京UFJ銀行の前身といえますかね、そこに入ってロンドン支店長などもやって、取締役にもなったんだけど、終戦後は退社して、リュウマチの静養のために龍野に戻っておられました。

そのお宅へ親父、関三から菓子を預かり、たまに持って行ったりしていました。それは、私の姉の敏子が「三木定」に嫁いでいたということもあったからでしょうね。

家の前で一高の寮歌を歌う人があれば、二階から手を振って応えられていました。

それから小松益喜[10]さん、この人は小磯良平氏と親交があった画家ですけど、龍野へ来ましてね。これは私の同級生の高野常治君のお母さんが赤とんぼ荘にこの人を招いたときにね、その席に私も呼ばれて同席したんです。この招待は常治君の叔父さんの多田英次という人、英文学者で神戸大学の教授だった人なんですが、小松さんと親交があったためのことだったようです。

小松さんは、会社が別に依頼したわけではないんですが、会社の絵を何点か描いてくれましたんで、購入しまして、ホールにかけています。

小松益喜「鹿島会館より見たる龍野風景」

⑩小松益喜（一九〇四～二〇〇二）
高知県出身で神戸の異人館の画家として知られる。

そういえば、高野常治君の奥さん、高野美枝さんの遺作展がありましたでしょう。

―それはガリレアで。私たちも見にいきました。

淺井　そうそうガレリアでね。それを昨日、見にいきました。

そして、旧制甲南高校時代の同級生、平尾泰男⑪君ですけど、彼は阪大出身で阪大助教授から東大の教授となって、現在名誉教授ですが、紫綬褒章、勲二等瑞宝章なども受けて、随分と偉くなってますけど、「私の友だち二人のうちの一人だ」と甲南高校の会報にかいてくれたりしてましたが、こないだも電話してくれましてね。

高校時代には龍野に遊びに来て、下川原の家にも寄り、彼のお母さんの新宮の実家へも行ったりしました。

スプリング8の設立に先頭に立って尽力した人です。当時の貝原知事が「やっぱり兵庫県出身の人に来てもらいたい」と要請されたんだけど、研究拠点が筑波にあるので、その要請は断られたようです。

それからスプリング8ができた後、彼はお医者さんに対して講演するために姫路へやってきたことがありましてね。「是非、良平君に会いたい」と連絡が入ったので、講演が終わった二時頃に会いに行ったら、「まだ、飯食ってない」と言うんで、一緒に食事をして、それで新幹線の最終まで喋ってました。

平尾泰男

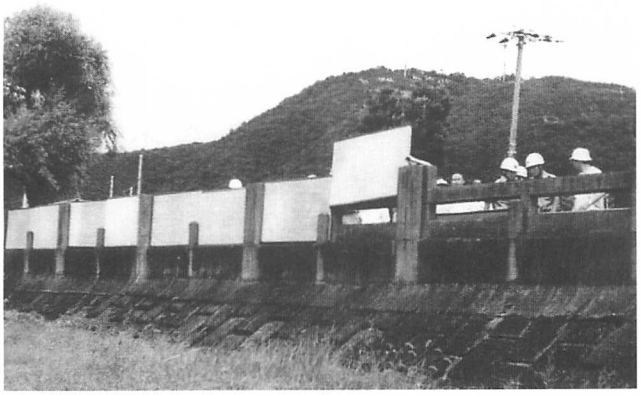
⑪平尾泰男
核物理学者。理学博士。加速器物理学界に貢献。
一九六七（昭和四二）年東大教授。
一九九一（平成三）年東大名誉教授。
一九九三（平成五）年放射線医学総合研究所長。一九九七（平成九）年同上顧問。二〇〇〇（平成一二）年日本分析センター会長。

龍野の町について

―それでは、龍野の町の話と言うことになりますが、そのよいところと言いますか、好きなところと言いますか。思い出なども交えてお話しいただければと思います。

淺井　やはりまず揖保川でね。小学校の頃、夏はいつも揖保川で泳いだり、鮎やじゃこをとって遊びましたからね。その当時は畳を入れる堤防⑫がなく、昔は向こう岸まで、水は一面にありましたね。

⑫畳を入れる堤防
畳堤（たたみてい）といい、欄干のように見える柱の間に、増水時に畳を入れる堤防。


畳堤

―今とは水量が全然違うんですね。

浅井　このあたりのことは引原ダムができてだいぶんかわりました。

とにかく魚で明け暮れてましてね、取ってきた魚は、自分の作った家の池に放したりしてたんですけど、おばあさんが信心深くて、翌朝川に戻したりしてました。

夏場水が少なくなる時があったんですが、その時は朝日橋のあたりで土のうを積んでね。その朝日橋の深いところへ飛び込んだりしました。

それから、また、台山もね。台山の入口近辺の赤土で、よく滑って遊んだものです。

夏の朝日橋

―私らの時には、「赤すべり」と言っていたんですけど、同じところでしょうか。小学校の頃にはよくそこへよく行きましたけど。今はどうなっているのか分かりませんが。道がよく分からなくなっているんで。「赤すべり」にはよく行きましたよ。

浅井　台山といえば、こんなこともありました。中学時代、深谷という先生がいて、何かといえば罰としてよく山の上まで上がらされていたんですけど、ある時、台山の頂上で「深谷のバカ野郎～！と友達と叫んでいたら、風向きの加減でそれが聞こえたようで（笑）、降りて戻ってきたら「もう一回上がってこい」と言われましてね、一日で台山を二往復したことがありました。

こういうこともあって、旧制高校や大学から帰ってくる時、龍野橋の東側から鶏籠山、台山、揖保川を見たら、「あぁ龍野へ帰ってきたなぁ」とつくづく思いましたね。

龍野の町の将来像

―それでは最後に、龍野の将来像などと言うと大げさな言い方になるんですけど、平成一七年から一九年まで龍野商工会議所会頭もされて、龍野はこうあって欲しいというようなことで、お考えや思われることがありましたら、お願いします。

浅井　そうですね、近年、市内の古い町並みを生かして、蔵などで音楽ライブやったり、美術展を開いたりというイベントが行われるようになってますが、こういう取り組みを積極的に応援したいと思っています。

地場産業も、醤油・素麺・皮革がありまして、醤油や皮革は成熟してあまり伸びてないですけど、素麺は健闘しているように思いますね。

地場産業が、もっともっと工夫しともに発展していくよう頑張って欲しいですね。

（聞き手・室井美千博・原田　研一）

龍野を想う（一）

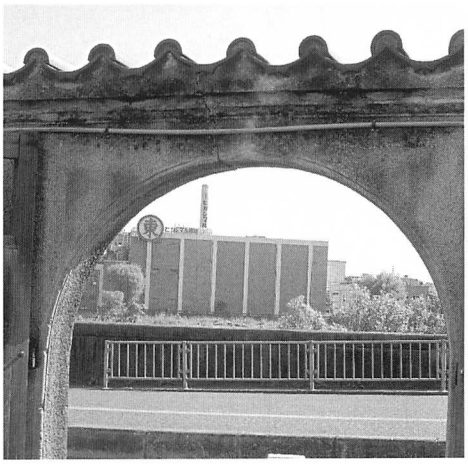
前田　陽一

龍野の良さ

昨年（一九八四年―編者注）、ヒガシマル醤油さんから依頼を受け、同社や淡口醤油を紹介する映画を作るために、春、夏、秋の三回龍野に帰りました。

撮影するのが自分の故郷とあってはつい欲が出て、あれも写したいということになり、短い日数の中で龍野じゅうを駆けずりまわったことでした。

内容の方も、単なるP・R映画というのでなく、地元の学校や市民の集りなんかでも上映されて、見た人たちが郷土を再認識し、誇りを持つキッカケになるような映画にしたいなどと、こっちが勝手に拡大解釈した制作意図を、ヒガシマルさんの方も快く賛成して下さって、気持ちよく仕事ができました。



ヒガシマル第一工場

私の連れてきた少数精鋭のスタッフは、みんな龍野へ来るのが初めてでした。私は内心、彼らが龍野のことを何と言って賞めるか楽しみにしていました。

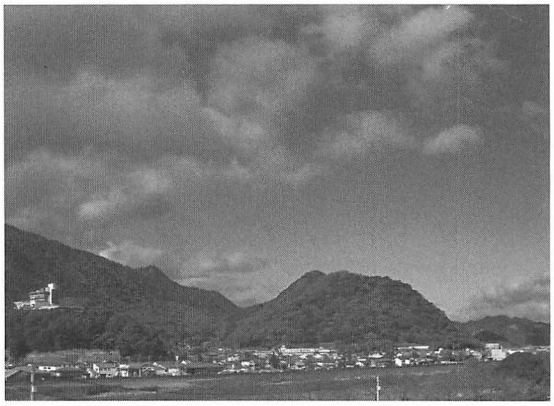
しかし、彼等は数日経っても何の感想も口に出しません。感受性の鈍い奴等だ全く！しびれを切らして私は、催足がましく言ってしまいました。

「どうだ、龍野はいい町だろう!?」すると、スタッフの一人がボソッとして言いました。

「いやあ監督の故郷があんまりいいところなんで、ヤキモチが妬けて口に出すのもシャクでした」

子供の頃から隅々まで知っているつもりの龍野でしたが、撮影するとなって、いろんな角度から眺めてみて、改めて龍野の良さを感じました。全国の小都市の中でも指折った三つの中には確実に入るのではないかと思います。これは私の郷土びいきを抜きにして、職業柄日本のあちこちを回ることの多い人間として、回るだけでなく行く先先の土地の魅力というものに充分な眼くばりをする必要のある人間として、客観的にそう思うのです。なにしろ映画のスタッフがヤキモチを妬くくらいなのですから。

まず地形など自然環境がいい。緑の丘陵に囲まれ、しかも東南に大きく平野が拡がっているので、盆地の息ぐるしさがない。街を縫って流れる揖保川、林田川は瀬の音の高い清流だ。ほどよい位置に小山ながら日本でも珍しい原始の林相をもつ鶏籠山がくっきりと居座って川の流れに影を落し、龍野の見事なアクセントになっています。そして、台山の麓のゆるやかな斜面に旧城下町の面影を残す街並みが、落ちついた瓦屋根の軒を連らねて拡がっています。龍野公園の桜、白鷺山のつつじ、紅葉谷のもみじと、四季のうつりかわりを楽しむ場所も豊かで、まことに龍野は日本の都市のよいところを少しずつ集めてきて、きれいな幕の内弁当にしたような町だと思う

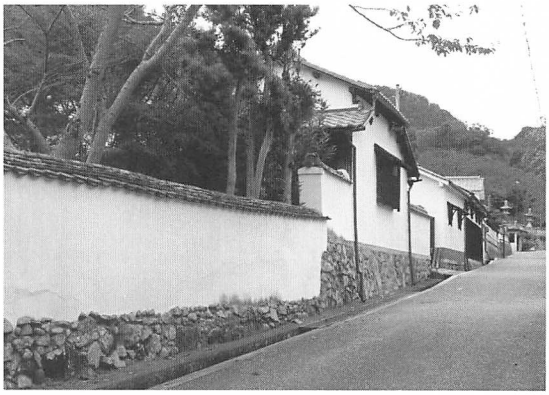


龍野眺望

わけです。

こんな龍野も、私が帰ってくるたび、僅かずつ変化していくように見えます。その方向は、日本のどこにでもあるつまらない町（全く、どこへ行っても同じような町ばかりになってきた！）の方向に動いているように思えるのです。龍野がそんな町の一つになってしまうのは、とても我慢ができません。幸いここらで何とか少しでも食い止めて、いつまでも人の羨む町にできないものか。

私はここに文章を連載する機会を得ましたので、私の龍野への想いと、まずは町の姿に対する夢や希望をやや手前勝手に書きつらねることから、始めさせていただきたいと思います。



中霞城

景観点について

四国の伊予に大洲という町があります。鮎狩りのできる清流に沿った、今なお城下町の面影を色濃く残している美しい町という点で龍野によく似ています。司馬遼太郎の「街道を行く」というエッセイの中で、氏が初めて大洲を訪れたときの印象を記しています。

氏は川越しに大洲の町を遠望し、その美しい佇まいに讃嘆するとともに、何か最近建てられた大きな公共の建造物の形と位置が、その景観を著しくそこなっているのを嘆いていました。

私も以前、ロケ地探しの旅で大洲に行き、司馬氏と多分同じ位置に立って同じことを残念に思ったことがあったので、氏の指摘に共鳴したものです。

氏はそのとき播州龍野の景観を思い出したらしく、こういう美しい景観を持つ町は、それを大切にしてもらいたいという意味のことを書いています。氏が、すぐさま龍野を連想したということは、よほど龍野が印象に残っていた証拠でしょう。

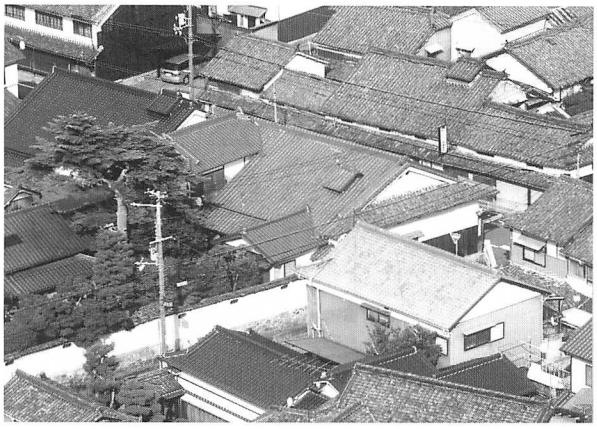
氏のまぶたに焼きついている龍野の風景は、おそらく龍野橋の東詰めから揖保川越しに旧龍野町を望んだ風景に違いありません。脇坂甚内のことを材とした氏の小説「貂の皮」の書き出しの部分で、その風景に触れて昔は「城の白壁がよく映る景色であったであろう」と書いています（龍野城の櫓や白塀が復元される以前に書かれた小説です）。

絵葉書などにも必ず入る風景であり、龍野という町を想い浮かべる時には、まずその景色が出てきます。

いわば「龍野の顔」というべき景観です。この景観に龍野の人たちが、これまで充分な配慮をはらってきたかどうかについて、少々心もとない気がします。

金もうけに関係のない風景なんかにとやかくいうのは、風流人や趣味人の繰り言に過ぎないという考え方は、少々乱暴だといわざるを得ません。

住んでいる土地の景観というものが、人間の心の深いところに大きな影響を与えるということは今では定説になっています。



本町界隈

住民の安息感とも大きな係わりをもつようです。近年、無秩序に膨張している大都市近郊に、中学生の校内暴力や親殺しが多く発生しているという事実も、そのことに関連して論じられるようになっております。

最近、どこの都市でも、やたらに「文化の向上」ということが叫ばれておりますが、立派な美術館や市民ホールを建設する以上に、街並みの美しさを創造、あるいは保存、再生することの方が、ずっと「文化的」であると私は思います。

それは直ちに住民の美意識の反映であるからです。

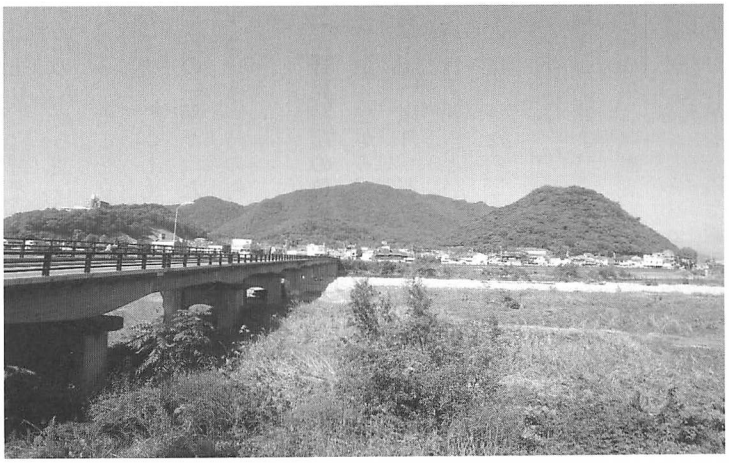
景観点という耳なれない言葉を、近頃よく見たり、聞いたりするようになりました。

主に都市計画の用語として使われておりますが、どこの都市にも代表的な風景というものがあり、それを眺める人間の位置を仮に景観点として定め、そこからの風景をより優れたものにするために、種々の行政的処置をとろうとするわけです。

龍野に景観点を定めるとしたら、まず第一にさきほどの龍野橋東詰めから、旧龍野町を眺める位置ということになるでしょう。

しばらく龍野の景観点を探ってみることにします。

（以下次号）



龍野橋東詰めから旧龍野町を望む

前田陽一（一九三一～一九九八）映画監督

本稿は霞城文化自然保勝会『龍野春秋』（一九八五年七月～一九九三年六月）に連載（龍野商工会議所『商工龍野』〈一九八五年一月～一九九一年三月〉から順不同で転載）されていたものであり、それぞれの関係者のご配慮で連載させていただきます。ただし写真は『ふるさと龍野』において新しく挿入したものです。

たつの地名の1300年

岸本　道昭

一　はじめに

「たつの」は、自治体合併がおこなわれた二〇〇七年まで、「龍野」または「竜野」と書き、公式には龍野市と表記されていました。龍野市と合併した周辺の町は、御津町、揖保川町、新宮町ですが、合併協議の途中では太子町も加わっていました。これらの市町をまとめて「たつの」と呼ぶことは、いまでも旧町の人々にとっては違和感があるのではないでしょうか。

しかしながら、歴史をひも解けば、もともと約一三〇〇年前の七世紀には、ほぼ全域が「揖保郡」というひとつの地域であり、歴史的なまとまりとしては一体感があったのです。合併にあたって、新しい市の名称は、多くの案が検討されましたが、最終的にヒラガナの「たつの」に落ち着きました。あれからもう五年も経ちました。歴史的な地名を大切に思う立場からすれば、とってつけたような現代風の名前にならなかったことを素直に喜びたい気持ちです。

さて、その「たつの」という地名の話を、歴史的な来歴からふり返って、ここに紹介したいと思います。

二　『播磨国風土記』の発見

すでに有名な話ですが、「たつの」という名前が最初に記されたのは『播磨国風土記』です。八世紀前半に編纂された古文書で、平安時代に書写されたものが残っており、これが国宝になっています。

相撲の元祖と呼ばれてよく知られている野見宿禰ですが、伝承では出雲から召されて当麻蹶速と力くらべをおこないました。これが相撲の始まりとされています。また、亡き主君への殉死の風習を改めて、埴輪に代えることを提案したことでも宿禰は有名です。これらは『日本書紀』に記されているのですが、宿禰が播磨国揖保郡で没したことを伝えているのは『播磨国風土記』のみであり、ここに「たつの」地名が出てくるのです。『播磨国風土記』（山川出版社）を参考に、関係する部分の訓読文を以下に紹介します。

「立野。立野と号くる所以は、昔、土師弩美宿禰、出雲国に往来ひて、日下部野に宿り、乃ち病を得て死にき。爾時に、出雲国の人、来到りて人衆を連ね立て、川礫を運び伝へ上げて、墓山を作りき。故、立野と号く。」

つまり、立野という地名は、人々が墓造りのために立ち並び、川原石を手越しにした野だから、そこを立野と呼ぶのだと記しているのです。しかしもともとは日下部野というところの一部だったのでしょう。これは日下部里という当時の村のことを記した部分です。

三　野見宿禰の墓探し

しかしながら、宿禰の墓の伝承は『播磨国風土記』以外、どこにも残っていませんでした。日下部里という地名すら揖保郡には残っていなかったのです。ところが、それを記した『風土記』が江戸時代に発見されたことで、墓探しが始まりました。もともと伝承があった場所に、文献史料が発見され、その伝承の信憑性が高くなるのが本来の姿なのですが、こと野見宿禰の墓に関しては、まったく逆の

ことがおこったのです。新たに見つかった風土記という文献にそのことが書かれていたために、どこかに千年も前の宿禰の墓があるはずだ、ということになったのです。そこで無理やり墓の候補地を探すということになりました。

もともと伝承のなかった地域で大昔の墓を探すのは難しいのです。風土記が記す墓山を古墳とした場合、龍野には多くの古墳がありすぎて、特定することができなかったのです。宿禰の「土師」という名前から、揖西町西部の土師に注目し、そこにたまたま知られていた鶏塚古墳（写真1）という小さな古墳が候補地にもなったようです。

写真1　鶏塚古墳

いっぽう、「立野」だから龍野町あたりという見当をつけ、日下部里は、龍野町から日山一帯であろうと考えられました。おそらく当時から知られていた狐塚古墳（写真2）などが候補になったのでしょう。

写真2　狐塚古墳

しかし、今のように歴史の研究がすすんでいない当時のことですから、実証的な手続きをせずに野見宿禰墓は決められてしまったようです。結局、明治時代になって、候補地の一つで台山（今の的場山）にある古墳状の高まりに野見宿禰神社創立が目指されます。そして石段や玉垣が施されたために、ここが宿禰の墓（写真3）として定着してしまったのです。

四　立野から龍野、〝たつの〟へ

さて、たつの地名の話に戻ります。ともかく、「たつの」は一三〇〇年前の『播磨国風土記』に記された「立野」が起源であることはほぼ確かなようです。しかしながら、そこに書かれている日下部野や野見宿禰墓の場所がはっきりしなかったので、「立野」がどのあたりの「野」なのか、わかりません。そこで、「立野」がどのように「龍野」になったかを探ってみたいと思います。

古代の文献である『播磨国風土記』や『和名抄』などでは、揖保川下流域はほぼ揖保郡と呼ばれています。揖保郡は他の漢字を当てることもあり、揖東郡や揖西郡に分かれることもありますが、一貫してこの地域の地名です。ところで「立野」は、小さな野原の名前のようで、古代の村の名としても出てきません。

写真３　野見宿禰墓推定地

中世になり、荘園史料などによって古代以来の地名はたくさん残っていますが、立野という地名はすっかり姿を消してしまいます。地元で伝えられていた程度で、史料として歴史の表舞台に現れることはなかったようです。少なくとも私の知る限り、風土記の書かれた八世紀以来、一五世紀までの約七〇〇年間、〝たつの〟と記された史料はなかったと思います。

ところが、一六世紀になってから「龍野」地名が史料に散見されるようになります。鶏籠山の古城に赤松村秀が城主として入った、とされるあたりからです。まずは城の名前、「龍野城」として歴史の舞台に復活します（『龍野市史第四巻』）。また、小早川隆景書状に「播州立野」、毛利輝元書状写にも「播州立野」という言葉が出てくると『兵庫県地名大辞典』（角川書店）は書いています。これらは天正年間のことで、織田勢の羽柴秀吉が播磨侵攻をおこなったころの史料です。

どうやら、立野は小字程度の地名が起源のようでした。だから七〇〇年間もひっそりとしていたのです。しかし、この立野の地にある鶏籠山に古城がまず築かれ、江戸時代を通じて脇坂氏の居城が山のふもとに築かれてから、立野はいつしか龍野と表記されるようになり、歴史の表舞台に復活したのでしょう。立野の立がなぜ龍の字をあてるようになったかはわかりません。龍野藩は江戸時代の終わりまで続き、龍野という地名を確かなものに育てあげたといえるのではないでしょうか。そこには広大な龍野城下町（写真４）が形成され、龍野町という町名に変わり、昭和二〇年代になって龍野市が生まれ、平成の大合併で「たつの市」となったのです。

今から一三〇〇年も前に生まれた「立野」という小さな地名は、生まれてまもなく七〇〇年間も歴史に姿を見せませんでした。長いあいだ静かに語り継がれてきましたが、一六世紀の戦国時代に突如として復活し、歴史の舞台に生き続けました。小さな野原が城の名となり、町の名となり、それがいつしか行政の名称となり、人口八万市の名前にまで出世したのです。立野から龍野、そして〝たつの〟へ、歴史の荒波を越えて語り継がれ、愛されてきた地名として、これからの行方を見守っていきたいものです。

（たつの市教育委員会文化財課課長補佐）

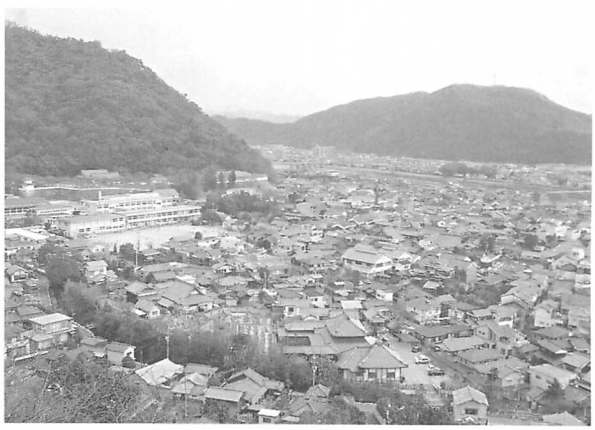


写真４　日下部野推定地（龍野町）

龍野をえがく

◎龍野を彫る―乾太氏に聞く（第一回）

◎三木露風研究　作品の故郷を歩く（一）

◎紹介　薄田泣菫「揖保川にて」

龍野を彫る

乾　太　氏に聞く

（第一回）

僕の育った頃

―一九七〇年位に「僕の育った頃」という御作がございますね。お幾つくらいの時で、その少年は先生ご自身ですか？

乾　僕という訳ではありませんが、自分の覚えとしては、その風景は裏の川の風景でして、川でも戦前から戦後、何回も姿を変えております。

風景の土台になっているのは大体戦後の情景ですね。それで、思いとしては、戦前から戦中後の思い出です。

―ということは……

乾　終戦の年に一六歳ですから、一二・三歳から戦後間も無い位の……

―水浴びの風景ですね。

乾　夏の空、その日の入道雲が立っている。川で昔の子等が泳いでいる。そういう状態を絵にしたということです。

僕の育った頃

―その頃には先生は、漢文の素養があられたとか

乾　勉強じゃないんですけど、戦中、僕としては生涯で一番知識欲が旺盛だった頃です。その時分、文庫本一冊でも欲しいなと思ってもなかなか手にはいらなかった頃なものですから、家にある程度漢籍がありまして、それを全部読んじゃいました。

―漢籍というのは四書五経か何か？

乾　四書五経は読み出すのはもう少し後で、初学には批評する人によっては、「ずさんな編纂」と言いますけれども、『古文真宝』。前集が散文で後集が韻文ですね。それを一通り読んだら、初学が古典の大体の目星つけるに、（古典を学ぶのに）一番都合の良い本なのです。

それから、『唐詩選』という中国の唐の時代の詩を集めたものを、読みました。するとある程度中国の古典に対する興味が湧いてきました。それを、我が物にしたくて、暗記するようになります。もう大半忘れてしまいましたけど、だいぶ暗記していました。

―教えられるというよりも、そこにあったものを自分で読んでいかれたということですね。

乾　そうです。その後、四書（『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』）ですね。その後が、五経の（『書経』、『詩経』、『易経』、『春秋』、『礼記』）です。『礼記』は読みましたけど『春秋』と『左伝』は読んどりません。

―なるほど。

乾　その後読みだしたのが、唐と宋八人の文

人の『唐宋八家文』。何遍も繰り返し読んどりました。

―やっぱりそれはお家にあったものなんですか？

乾　ありました。それも白文で読んどりましたので、最初はなかなか難しいんです。図書館にある漢文大成をちょいちょい借りてきて見ながら、八家文を読んでそれから『史記』にかかりましたね。

―司馬遷の『史記』ですね。

乾　あれは相当大部でしてね。通読は三遍位しとります。

―『史記』を三遍!!

乾　それは大して自慢できるような事じゃないんですけどね。

―『史記』という名前しか僕らは知りません。

乾　ある学者が、「自分は『史記』を七遍通読した、それでもまだわからんところがある。」と言ったら伊藤東涯が、「わしは三十何遍読んだけどまだわからん」といったという……だから、決して三遍通読したと言って自慢になるもんじゃないんです。

史記は面白かったですね。その中の「八書」は面白くなかったけど、「列傳」、これはなかなか興味がありました。

―漢文を読み下して行かれる訳ですか。

乾　そうです。

―ある程度辞書なんかも持たれて？

乾　辞書は必要ですね。最初は漢和辞典か何かでやりますけど、なかなか文字が足らんのですね。

―なるほど。

乾　それで儒者で中霞城に家がある、その方はもう亡くなってますけど、その子息は高校の先生なさってました。

―三河さんですか

乾　そうです。その家に『康熙字典』があって、それを見せてもらいましたね。

―『康熙字典』？

乾　清朝の康熙帝の欽定（勅命により作られた部首引き字書）です。

―その頃、先生ご自身のお仕事は？

乾　戦後、家の実入りが全くなくなっていたので、山の間伐をしていました。なるべく午前中に一日分の仕事をこなして、自分の時間は午後から夜です。

―なるほど。

乾　それで、なんとか『康熙字典』が欲しいなあと思ってたら、ある日姫路のデパートで古書市があって、『康熙字典』出てましてね。丁度それが姫路で或る賞もろて帰りやったから、その副賞の金があったから……

その『康熙字典』、日本での出版ものですが、それが龍野の矢野塾出身で、東京で書肆鳳文館をやっていた前田圓（まどか）の出版なのです。この人、『資治通鑑』、『佩文韻府』など大部の漢籍を活字で印刷、中国へ輸出を試み、それが売れず倒産、鳳文館の看板の鳳凰をとり下ろして黙鳳と号して以来、六朝風の書を研究、書家として一家を成します。同郷の縁も嬉しく、買い求めました。

この人前田忠太の次男とありますが、どの前田家か誰も知りません。だけど辞書を手に入れるたんびにだんだん勉強せんようになりました（笑）

その後、高砂の十輪寺という浄土宗のお寺で、その住職が版画をやってられる縁で、お訪ねした時、諸橋轍次の『大漢和辞典』が応接間の本棚にあるんでね、ひさしぶうみたいと思ってたんで「ちょっと手に取らせてもらえますか」って見せてもらったら、やっぱり欲しいんですね。

字数が『康熙字典』よりもまだ多いんです。

その『大漢和辞典』を見てなんとか欲しいもんだと思ってたら、丁度その改訂版が大版で出ることになった。たつのの三木書店ですか、あそこに見本がありまして。無理して予

約しました。

それでうんと勉強するつもりが、ますます勉強しなくなりました（笑）

―しかし、結構その当時の金額にしたら……

乾　全部で三〇万余しましたね。次々配本されますからね。一冊で言うたら、他の本に比べりゃ、安いものです。辞書ていうものは。

―その辞書はいまも、どこかに置いておられるのですか

乾　二階にあります。『康熙字典』も『大漢和辞典』も。それを資料に漢詩なんか見よると、自分も漢詩をやってみたくなりますけど、漢詩には韻ていうものと平仄（ひょうそく）というものがありますね。平声（ひょうしょう）、上声（じょうしょう）、去声（きょしょう）、入声（にっしょう）の四つに文字が分かれてて、韻を踏んで、それから平仄を約束通り並べて。それをやりよったら最初の発想が別のものになってしまうんです。過去日本の学者で中国語ができる漢学者はほとんどありませんわね。

皆苦労して平仄に合わせて作り、日本語に訳して読んだから、苦労して。でも何の役にも立たん、そう思ったから作るもんじゃないと思いましたね。

―なるほど。

乾　それからまあちょいちょい古本屋で、屈原の『楚辞』やら、唐以前の文章を集めた『文選（もんぜん）』ていうものやら、大分買いましたが、ほとんど手がつかんまま、まだ突っ込んであります。

―その時分に先生はもちろん版画の方は彫っておられたんですか？

乾　もうやっていました。

―版画に着手されたのは二〇歳過ぎくらいですかね。

乾　ええ、二〇歳過ぎ。（一九五〇年頃）

―それまではアートの世界には関心はなかったですか？

乾　いや、大いにあったですね。家に百科大事典で、大隈重信が監修して、当時の一流の学者達を集めて出した百科事典で、中に絵の流派のそれぞれの解説なり、また、挿絵やら中にはカラーの絵巻物など入ってる。子供の頃から見るのが楽しみでずい分利用しました。

―美術に対する関心は小さな頃から？

乾　ええ、かなり持っていたと思います。

―一五・六歳くらいですか？

乾　僕が終戦を迎えた昭和二〇年が一六歳、それより前、まだ小学校に行ってる時分から、「土佐光信や尾形光琳、ありゃおもしろいな」なんて言ってた。

―やはり日本美術には子供の頃から関心があった。

乾　だけど僕の性格でしょうね。西洋美術にしてもギリシャ彫刻にしても、あまり完成したものよりも初期のアルカイックですか、あの時分の方に興味があるんですね。それからイタリアの北部エトルリアの、テラコッタの男の裸ですね

そんなものに関心持った。

―それから木彫へ行かれるんですか？

乾　木彫は多少はしましたが……

―やはり美術に関心を持ってらして、かたや中国の古典を学ばれてて、そういった中で棟方と出会う訳ですか？

乾　それはもうちょっと後になります。というのは戦後二〇年から三〇年頃戦中の様子と違って、いわゆるアメリカ一辺倒。風物や生活振りなどいいなと思う物がこわされていく。土橋があって村の入り口に水車があって、そういうふうな風景が、今度行ってみたら無い……小さな山くらいだったら無くなっている。それを自分の物にしておく手段、それは早く、今無くなる物を人の為ではない、自分の為に所有しとく、そういう手段がないだろうか……

僕にとって、青春の彷徨といいますか……

世間を放浪する様な時間はとてもなかった。美術であり文学であり、そういう物の中を彷徨したのが僕の青春ですね。

―文学では、特に日本文学はいかがですか

乾　日本文学をやり出したのは、もっと後ですね。最初の頃は『徒然草』なんかは、理屈ぽくてちっとも面白うないと思ってたけど、最近になってから大いに共鳴する事が多いですね。死ぬまで、あの世に持っていくのは不可能として、暗記しといたら自分の物にしておけますね。

―好きな個所は覚えられて？

乾　『徒然草』も岩波文庫であったけれど、最初の本は活字が小さくて、今は大判で出てますので、それ求めてから大分読んでいます。ボロボロになるほど。

―若い頃にわからなかった物を歳が共鳴させるのですね。

乾　だんだん共鳴して来ると、これを我が物にしときたい。物欲はあんまりありませんけど、そういうふうな方面、案外、欲があるんじゃないですかね。

それで、色々考えよったら、僕は元来筆で描くのは字も絵も苦手なんです。だけど版画ってやつは子供の、低学年の版画が面白いんですね。版画の嬰孩性（えいがいせい）です。戦後の物がない頃です。記録する為カメラなんていうのは、中々手の出せるもんじゃありません。考えよったら、これ版画だったら何とかなるんじゃないか。納屋にあった板切れを削って、それで小さな版で、風景を我が物にしとった訳です。

―その時に材料は板のどの様なものでも？彫りにくい物もあるんですね？

乾　何でも形が彫れて刷れる物、本来浮世絵や他の出版物にしても、大体、山桜を使っています。そんな贅沢は出来ません。納屋にある板切れ、昔はそういう板切れもいつか使えるっていうんで、薪にしてしまわないで残してあったんですね。それ削ってやってたんです。何年か、片手間でやってたもんだから、今思ったらあの時分もっとやっといたら良かったと思いますね。二、三年もそれやってると、やっぱり我が物にするには大きいのがいい。

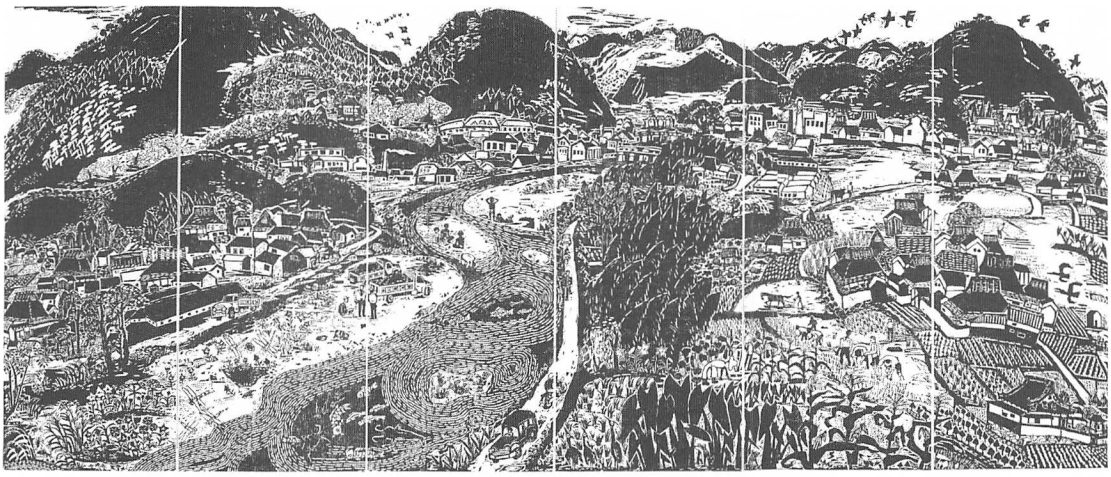
龍野風景

―それまでにスケッチという形でもうあちこちへ行かれてたんですね。

乾　無くなりそうな風景、それも早うスケッチ行かんと、と。飛んでいってもあるか無いか保証の限りじゃありませんのでね。スケッチしました。

―それは自転車で行かれる訳ですか？

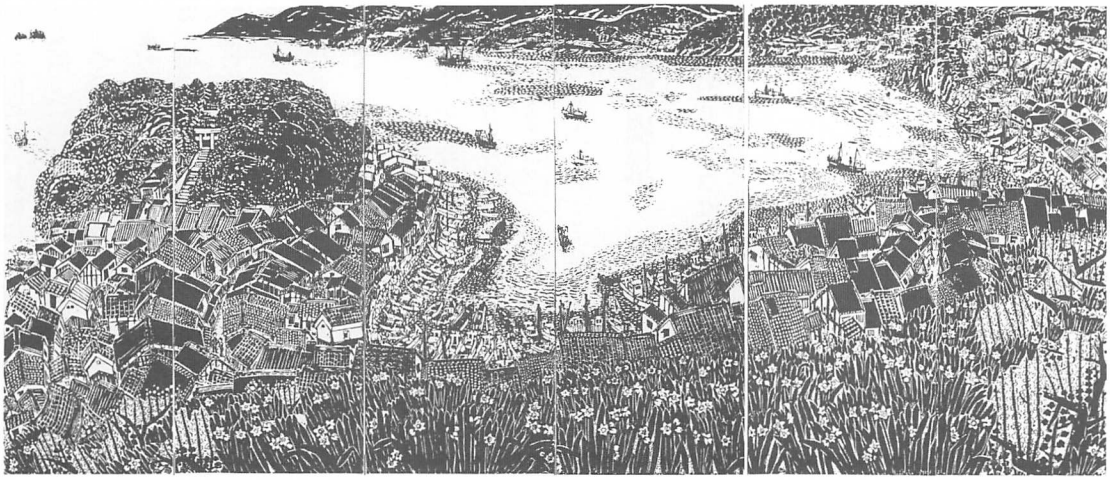
乾　自転車です。最初の「龍野風景」、それは青春のがむしゃらですね。版画始めて二、三年その小さな版画では何か食い足らなくなっ



龍野風景

た。その当時、ラワン材の、ベニヤ板は、戦後復興の素材です。田舎の材木屋にでもどこにでもありました。これは決して使いやすい素材ではないんですが、なんせそれしかないから、ベニヤ板買って来て、たつの風景やってみた。ベニヤ板四枚の絵は、額にできる大きさではない。六曲の屏風でやってみました。たつのの風景に四季が入っとる様に感じ取れますが、室町ごろから屏風に四季山水というのがあって、片方から春になってやがて夏が来て、最後は冬と雪……そのような表現方法は、青春の彷徨中の風景、順番にやるよりも、この部分は公園なら桜、揖保川なら夏ですね。勝手にあちらこちらに入れてますけど、作ってから後で思ったら、これもうちょっと考え方があったかなあと（笑）

その頃生活状態も変わったから屏風ていうものの利用が減って来た。それと戦後の財産税何やらというので、美術品が動いて道具屋がそれで儲けよった。で、絵が良かったら、屏風で売るよりは、はぐって軸にして売った方が金になりやすい。だもんだから、はぐった後の下地が残っとる訳です。あれ買うて来て、それで貼ったら自分の思いは出るなと思った、それこそ青春のがむしゃらですね。版画始めて何年にもならんものが六曲屏風手がけて、またそれを自分で貼ろうと言うのですから。



室津風景

立町に前田って言う表具屋があって、町中で一番間口が狭かった店です。狭い中で屏風でも貼っているんです。職人芸の腕の甲斐性でどうにでもなるもんだなあと感心した。自信持って、仕事しよるのを腰かけるとこも無い土間に立って見せてもらった。あれやこれやしゃべりながら、ああしてるこうしてるとある程度わかりますから。僕も屏風の下地買って来て自分で貼ったんですね。何とか出来てから、建てまわして、「播磨一国はわが手中」と悦に入ったものです。

室津風景

―それが三〇歳位？

乾　丁度三〇歳位ですね。たつの風景を屏風にした、その明くる年にやったのが室津風景ですね。

―室津の春ですね。

乾　意欲があったら、何とかなります。三㎜ラワンのベニヤ板丸めて、縄でしばって、自転車に乗っけて持って帰った。

―なるほど。

乾　ほかに無かったから…。なんせ三㎜なのでね

—その版木はもう使えませんか？

乾　たつの風景、それから室津、まだ無理したら刷れると思います。その後麦畑が出て来ます。これはね、ぼつぼつシナベニヤが出だした。

—やっぱり分厚かったですか？

乾　いや、三㎜で。それで麦畑やってますけど、生憎最初の頃のシナベニヤは接合が悪いんですね。何枚かを出来た時に刷っておいて、これだけ採れたらいい位のつもりでしたね。割合その麦畑は評判が良くて、欲しいという方がいらした。だから多数刷ってる。だけどやがて、刷ってる内に浮いて来て、仕方が無い。浮いた部分を引き上げボンドで押さえたりして、無理して刷りましたよ。

もう刷れんようになりました。結局、やるべき時にやれるようにしてやる。その時やってなかったら室津もどんどん変わっていきましたからね。現在の室津やったらあんまり絵にする魅力がありませんわね。少々しんどい仕事やなあと思っても、版画というのは版木が残ります。精一杯の仕事しといたら我が作品になる、という利点があります。でも、室津風景を一応仕立ててみて、どうしても気に入らんところがある。

—はい。

乾　元の絵にホワイト塗っといて、その上へ後から直したり、別の紙を貼付けたりして直していった。出来た作品を元町画廊で個展をした時に、自分がした表装で、出品しました。兵庫県立近代美術館、最初の館長の坂本さんが来てくれて、「こりゃ買うとかな」と、独断即決で売約してくれたんです。だけどそれが僕の手細工の表具なので、納入は仕立てを画廊のほうでプロにしてもらいました。

—県立美術館に収まったのですね。

乾　そうです。その後、今の天皇さん、皇太子のときに関西へ来られた時のこと。殿下が座っていられる後ろに、この屏風が立ててある映像がテレビで出たと知人から聞きました。

—ああ…！

乾　そういう風にしてやっとったら、そういう絵も出来る、人間いつまで生きるかわかりませんし、やりたいと思ったらともかくがむしゃらになんでもやってみることですね。

—室津の春当時は、先生独身でいらっしゃったのですか？

乾　作った時はまだ独身でしたね。それから元町画廊の個展のときは結婚二年めでした。

（以下次号）

（聞き手・吉田　純一）

狭斜雨情

狭斜雨情

如来寺の柳（先々代）は幹もさること乍ら、糸が長く浦川の水面まで届く長さがあって、美事であった。如来寺の西隣（現在の交番）が検番でした。

五月雨の夕方、橋の上で姉さん芸者と舞子さんが今夜のお座敷のうわさ話か下馬評をしています。姉さん芸者は大吉さん、舞子がしめ楽さんです。

（乾太氏談）

三木露風研究

作品の故郷を歩く（一）

和田　典子

「瀧つ瀬の玉より白いふるさと」
「樽の唄」より

日本で最も愛唱されてきた童謡「赤とんぼ」の作者三木露風は、故郷龍野を愛してやまない作家の一人であった。露風の童謡の中に、「追憶童謡」と露風自身が名付けている童謡群があり、「赤とんぼ」もそのひとつである。それらの作品は、故郷の風物や幼い頃の思い出の情景によって構成されている。四季折々の美しさを見せてくれる山々や聚遠亭、静謐な龍野神社の杉木立や石段、夕焼けに染まる街並み、そして緩やかなカーブを描きながらながれる揖保川……。これら思い出の情景が、辛いとき寂しい時は心の慰めとなり、また作品の原風景として立ち現れる。

「私に詩思を与へ、私の少年時代にして尚且つ思索に耽らしめたのは、何であらうかと、私は考へて見ると、故郷の山川である。」という露風の言葉通り、少年時代に過ごした故郷の自然―山の霊気、風のささやき、光の移ろい、そして宇宙の営みが、後に象徴詩人として成功するための基礎となる霊的で幽妙な感覚を体験させたのであった。

取り分け露風が好んだのは、聚遠亭から紅葉谷にかけての情景である。

両親の離婚後に引き取られた祖父の制の屋敷の裏手には、紅葉谷から流れ来る小川があった。その小川を辿り紅葉谷で待ちながら、幼心に「きっと母は帰ってくる。帰ってくるならばこの道しかない」と信じて孤独な時間を過ごしたのである。

六〇年後、詩人として童謡作家として成功を修め、郷土の偉人として、龍野市と龍野教育委員会、そして龍野図書館読書会の招待を受けて、昭和三〇年一一月一日に、露風は妻仲と共に久しぶりに龍野の地を踏んだ。そして、聚遠亭の別館に宿泊した。翌朝、露風は紅葉谷に散歩に出かけ、「紅葉」という詩を作る。第二連に

ふるさとに秋に帰り、
そぞろあるきの時、
眼にしたる美景、
たとへん方なくよし。

と歌う。さらに、

三木露風（中央奥）－聚遠亭において

ふるさとの　紅葉を見れば
いくとせを　へてもおなじき
おもひするかな

と詠んだ。久しぶりに帰郷して見た紅葉の変わらぬ美しさと懐かしさは、感慨深く、多くの詩や短歌が生まれた。それらは、「龍野まで」という未発表の随想にしたためられている。

数日後、東京に戻って、遠く故郷を思い出したとき、思わず呟くように歌い出された「ふるさとを思ふ」という詩には、

ふるさとに帰りて、
家に戻りしが、
また見むと思ふ心あり。

よき人々よさきくあれかし
かはらぬ彼の山河。

遠くへだたりはすれど、
忘れじふるさと。

とあり、帰郷時の懐かしさを反芻している。そして再度の帰郷を望み、さらに出会った多くの人々が、「幸多くありますように」と願っている。

露風は、一五歳の時に出郷して以来、常に望郷の念を抱いており、折に触れ故郷の山河を思い描いていた。その懐かしい情景が、晩年になっても変わらずにあったという感動が、昭和三〇年の帰郷をひとしお感慨深いものとしたのだろう。「龍野は、帰ってみると、依然として、かわらない龍野である」と「龍野まで」に、帰郷した一日目の記述として残っている。そして、龍野の説明と歴史を語り出す。

露風は歴史好きで、彼の日記や随筆には物事の由来や歴史を記した箇所を多く見いだすことができる。知っている場所や事柄を、露風がどの様に書いているのか、またその景観が、どのような作品に仕上がっているのか興味がそそられる。

もちろん「龍野まで」にも、作品の他に訪問先の説明や歴史が多く記されている。「龍野まで」を道案内に、龍野の町を歩いてみよう。

龍野は、町通りの道が多いのである。それであって南北に長いのである。西と北とに山があって、西は二山、台山と白鷺山である。北は一山鶏籠山である。

龍野の地形をご存じの方なら、風景が思い浮かぶだろう。露風は、龍野の地形を語るときも、大好きな山のことから語る。龍野の山の名前は鳥の名前が付けられている。鶏籠山は、ニワトリを飼う籠の形に似ているからという。そして紅葉谷に添って両見坂峠へと登っていくと、「鵠の巣山」に至るが、この名前も、母鳥である鵠が、卵を暖める形から名付けられたという。地元では「鴻の巣山」と書くようであるが、露風はあえて「鵠」の字を使用している。「母鳥の山」と言うが実際は岩山で、童謡「山彦」の第四連に「瑠璃のそらの隅々に、／お城のやうな岩がたち」と歌われる山である。かって、その山には実際に白い鳥が住んでいたようで、昭和四〇年頃でも、その山に白い鳥が舞い降りるのを何度も見たと聞く。露風の少年時代にも、白い鳥が居たのだろう。鵠か鴻か鷺なのかはわからないけれども……。

その「鵠の巣山」から見下ろした風景を小説「悩」では、

町は扇の形をして向ふへゆくほど広がってゐる。丁度省吾（主人公：和田注）の立ってゐるところが要の様なものである。……そこでさらに視線を遠くへやって見ると、

広い広い野だ。そこでは地が肥えて穀物がずんずん成長してゆく。―川の面には白帆があつた。帆は膨れて真向に向いてゐるが、動いてゐるのか…

と描写している。豊かな実りをもたらすはろばろとした平野と、揖保川の白いうねりを描いていくのである。

さて、「龍野まで」では、自然描写の次には、人々の気質について語る。

龍野は、伝統の古い所である。さうして龍野の人は、大むね敦厚（概ね温厚か？和田注）である。尚又勤勉である。

次に、文化や産業についても語る。

産業は大である。それは醤油である。明治の高等小学校読本に「醤油は龍野なり」とあって、折紙が、つけられてゐたのである。それであるからして、実に醤油の会社が多いのである。

「醤油は龍野なり」と、高等小学校の読本に書いてあったことを、この一文から学んだ。この記述が事実であるか否かの確証は取れていないが、恐らく露風が使用した当時の教科書に掲載されていたのだろう。

龍野醤油株式会社といふ会社は、ずいぶん大きくやつてゐて、それは横町にある。建築が大きくてよいのが眼に付く。

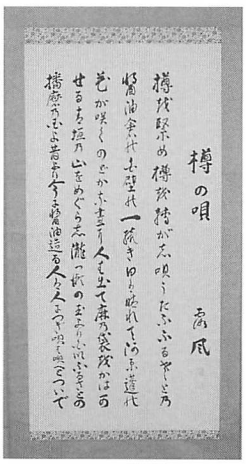
と続く。「横町にある」という表現が、いかにも地元の者ならではの言い様で、露風の生家（龍野城跡への入り口の南、家老屋敷門の斜め向かい）から一〇〇メートルほど揖保川よりに下がったところに醤油工場があった。

露風は、昭和三〇年の帰郷のおり、龍野醤油の社長の浅井関三氏とも対面した。浅井氏のご令嬢節子さんは、「ふるさとの」詩碑の除幕式（昭和一五年一一月）で綱を引かれた小さなお嬢さんであったことを思い出したようである。

詩碑建設委員の中には、浅井博氏もいらっしゃったようで、博氏に関することにも筆は及んでいる。

醤油の醸造家であつて、その大きいことは揖保川の東岸に醤油の大倉庫九棟が並んでゐる。

とある。「市の景が、博氏のものであることによっても知られる」とあり、露風の故郷の風景の中には、醤油工場の情景がとけ込んでいたのであろう。露風には「樽の唄」という作品があり、自らその冒頭を揮毫したものが郷土文学資料館である霞城館に残されている。作品を以下に掲げる。


樽の唄　露風

樽を緊め、樽を轉がし
唄うたふ
ふるさとの醤油倉の
白壁の一つづき

日は晴れて
河原蓬の花がさく
のどかな昼に人は出て
麻の袋をかはかせる

樽の唄（霞城館蔵）

青垣の山を繞らし
瀧つ瀬の玉より白い
ふるさとの
はりまのくによ

昔より今に
醤油つくる
人は人につぎ
唄は唄へとついで

『蘆間の幻影』より

第一連を、湯ぶりという作業行程の様子から歌い出す。樽にお湯を掛けて、樽の殺菌と同時に木に水分を含ませて膨張させ、樽を締める作業である。その時に歌われる樽の唄が、高く低く、ゆったりと底辺に流れる。酒作りにせよ、醤油作りにせよ伝統的な作業工程を踏んでいく職場では、技術を人から人へ伝えると同時に、作業を楽にしたり互いの息を合わせるための唄をも継いでゆく。古来からの唄本来の役割でもあるわけだが、日本の民衆の唄は、即興で歌詞を付けられ、それを歌い継いで行く場合も多い。だから、ベースは同じメロディであってもさまざまなバリエーションが生まれ、地方によって違い、場所によって違ってくる。恐らく、龍野でも独特の醤油作りの歌や樽の唄があったのであろう。第一連と第四連が見事に呼応した情景になっている。

「歌」ではなく「唄」とした軽快さは、作品の調子にも表れており、詩句の使い方は露風得意の文庫調で流し、色彩の対比の美しさを強調しながら象徴詩としての手練れも見える。

解釈が困難なのは第三連であろう。詩の表面の意味は、「ああ、ふるさとの　はりまのくによ」という詠嘆しかないのだが、三重にも四重にも技巧が張り巡らされて渦のようになっている。読み解いてみると、まず、詩全体の構成として、起承転結の転の部分として、播磨の国、龍野の自然描写が挟み込まれている。「青々とした山をまわりに繞らした瀧のしぶきの玉のように白い（尊い）ふるさと、播磨の国よ」という意味が外側の意味であろう。やや強引な感じも受ける「瀧つ瀬の玉より白い」は、技巧的には「瀧つ瀬の玉」が「白い」を導き出す枕詞的用法であるが、「瀧つ瀬」の同音の「龍」（架空動物）のイメージの黒と「玉より白い」の白とのコントラストを際だたせている。そして、さらにその奥に、故郷龍野の名前の由来、龍の天へ駆け上る地である故事を踏まえたイメージある。

地元の方は経験されたことがあると思うが、揖保川から立ち上る靄や霧が龍野の町を囲む山々に当たって、本当に龍が天に駆ける様子を見せてくれる現象を。筆者は、見る度に感動する。おそらく故郷の名前を口にするとき、露風の胸中にもこの光景が横切るのであろう。

もともと枕詞は、古くから使用されていた技法で、神や地名に掛かるものが多く、ダイレクトにその名前を口にするのは畏れ多いので、ワンクッション置くという意味があると考えられていた。地名を言うことは、古人にとって地霊を呼び起こす畏るべき行為であったのだろう。ここでは、一行目に「青垣」は「山」に、二行目で「瀧つ瀬の玉」が「白い」に冠せられた枕詞風の使い方がなされている。さらに、一行目と二行目が、「ふるさと」に大きな枕言葉的な用法で掛かっており、「ふるさとの　はりまのくによ」という大きな詠嘆となる。象徴の技法では、「玉のように白い」＝故郷であり（これは単純な象徴）それを青々とした山が大切に取り囲んで守っている、（それはまるで龍が大切に命の玉を守っているように＝暗示的な象徴）というイメージを重ねていく手法が採られている。「ああ、ふるさとよ、播磨の国よ」という詠嘆はさらに深まり、故郷に対する畏怖の念さえ込

められている。このように段階的にイメージが押し寄せてくるのが、露風の象徴詩の妙味である。

最後に第三連に込められたイメージの渦巻き（古代からの伝統・故事・畏怖の念さえこもった郷土への愛、詠嘆）を乗り越えた後の第四連は、第一連と同じ風景でありながら、より深い、より大きな、永遠の宇宙の営みにも似た光景に変わってはいないだろうか。重ねて問うが、第一連では、単なる樽転がしの唄であったのが、第四連では人から人へと受け継がれる永遠の命の唄には変わってはいないだろうか。悠久の人間の営みを守り、守られている「ふるさとよ」という露風の故郷への思いが、琴線に触れ伝わってくる。「樽の唄」も軽やかでありながらも、深い故郷への愛情が込められた露風の象徴詩なのである。

＊「龍野まで」は、昭和三〇年・三一年に帰郷した際に書かれた、旅行記風の随筆で、露風の故郷への思いが詰まっています。連載で少しずつ原文を紹介する予定です。

＊この連載コーナーでは、「龍野まで」に書かれたことを手掛かりに龍野を案内しつつ、故郷の様子が露風にはどのように写っており、作品化されていったかを紹介します。あなたの知っている場所が次々出てくるのでお楽しみに。

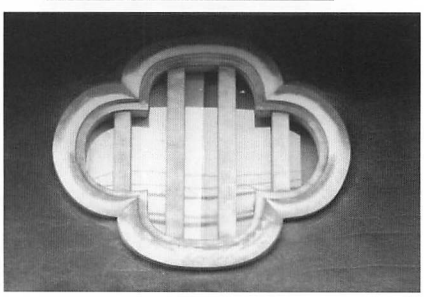
＊露風の詩は、「晦渋（＝むずかし過ぎる）と言われていますが、龍野に関する作品などを、易しく解説しますので一緒に鑑賞しましょう。

（近畿医療福祉大学教授）

町角 新町界隈

▶井口家住宅　鬼瓦

▶内藤生餡所　行灯



▶内海家住宅　虫籠窓

▲篠本家住宅　うだつ

▲淺井家住宅

紹介

薄田泣菫「揖保川にて」

水色白き揖保川の、
みぎはを染むる青草に、
牛飼ひなるゝ里の子を、
誰し哀れと見玉ふか。

堤七里に行き暮れて、
脚絆解く間の夕闇を、
城のやぐらに花散りて、
老いにけるかな、この春も。

牛追ひかへる野の路に、
踏むは、紫、つぼ菫、
踵すりよせ佇みて、
なげく心を知るや君。

人に別れて野にくだり、
牛追う子らの名に入れど、
春ゆく毎に袖裂いて
昔の夢を思ふかな。

星はいでたり。夜頃來て、
慰めを見る其のかげに、
今宵は堪へず膝をりて、
袂に顔をさしあてぬ。

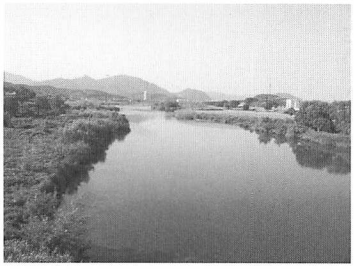
あゝ和らかき真砂地に、
蹄のあとをさはりみて、
智覚なき身に人知れず、
熱き涙をそゝぐかな。

たのしみもなき人の世の
寂しき境に泣かんより、
われは情ある獣物の
野邊の睦びを望むなり。

みぎはを染むる青草に、
水色白き揖保川の
牛追ひかへる里の子を、
誰し哀れと見玉ふか。

（『暮笛集』より）

薄田泣菫（すすきだきゅうきん）（一八七七《明治一〇》年～一九四五《昭和二〇》年）



『暮笛集』は薄田泣菫の第一集として、数え年二三歳の時、一八九九《明治三二》年に発刊されている。

それに収められた「揖保川にて」は、その二年前、徴兵検査のために郷里の岡山県連島に帰る途すがら、書かれたものであるという。

ここではここに描かれている情景の一つを見ておきたい。

山本武夫先生は『龍野と文学』（東丸記念財団刊一九九〇年）で、次のように書かれている。

「……山陽線龍野下車恐らく徒歩で揖保川堤を龍野へ向かったものであろうか。

堤七里に行き暮れて
脚絆解く間の夕闇を
城のやぐらに花散りて
老いにけるかなこの春も

堤七里とあるのは海路来て網干港上陸、土手伝いにでも上がってきたのだろうか。それとも文学表現のあやであろうか。そう思うと『城のやぐら』も現実とは思われない。詩人の幻影だろう。」

また、龍野を訪れた宮崎修二朗氏も、泣菫のこの詩にふれて、「揖保川のほとりでバスを捨てると、鶏籠山の南面、いま女学校のあたりにまず目を投げた。……あるいは龍野の城跡がまだ残っていはしないかと思ったからであった。泣菫が……明治三〇年の春龍野に立ち寄ったときは、まだその城の面影は残っていたのだろうか。」（『文学の旅・兵庫県』神戸新聞社刊一九五五年）と、城へと想いを馳せている。

この当時、城はどのような様子だったのか。確かなことは分からないが、ほとんど往時の姿はとどめていなかったのではないだろうか。あえて「城のやぐら」らしいものを尋ねるとすれば、城の東端にあった「太鼓櫓」であろうか。これは大正年間まで残っていたがどうであろう。

ところで泣菫は、当然のことながら、「揖保川」に託してあくまで自分の「思い」をうたっている。

しかしその「思い」もそれを掻きたてたであろう情景も、今となっては、昔のことに過ぎないのだろうか。

（室井美千博）

龍野に生きる

◎龍野芸者―龍野全盛の頃

◎たつの　浦川・十文字川抒情

◎龍野の藍染

聞き書き生活史

龍野芸者

龍野全盛の頃

戦前まで、龍野の旧市街地にはおよそ一二〇人の芸者がいたと聞く。

龍野の街の全盛期に、芸者として生き、現在も、「スタンドふるさと」を開いている岡本みつ子さん（九〇歳）に、古き良き時代の龍野について話を聞いた。

月曜日から金曜日の夕方五時半になると、「ふるさと」の看板の灯りがぽっとつく。この灯りを通りすがりにみて、「おかあさん、今日も元気」と思っている人は、結構多いかもしれない。昭和三三年開店なので、営業は五〇年を過ぎた。

店には一〇席ほどの椅子があり、カウンターの中に立つ岡本さんは、背筋をピンと伸ばし、記憶、会話のスピード、顔の色つや、とてもその年齢には見えない。

スタンドふるさと

「生まれた所は龍野町日山、今は空地ですが、粒座神社の斜め向かえ、井上製パンさんの北隣りですわ。『龍野温泉』ゆうて、冷泉が出てたんです。それを父が経営してまして、お客さんは温泉に入りにきて、その内に昼ごはんも出すようになり、余興に私は子供でしたけど、踊りをみせたりしてました。子供が多くて、貧乏でした。一二歳のときに、桶屋町の『杉本』という置屋に預けられました。昭和八年のことです。」

預けられた際に、五年返済の約束で、彼女は五〇〇円の借金を背負っている。置屋での着物、化粧品、髪結い、食事代などの掛かりは自分持ちである。当時、お座敷の銚子一本七〇銭、給料は一座敷一円五〇銭と、彼女の記憶は鮮明である。

置屋には七、八人の舞子や芸者がいて、三味線、太鼓、鼓、端唄、踊りなどを稽古していた。東北、京阪神、姫路などの各地から女の子が集められ、置屋に連れてくる女衒（ぜげん）が龍野にもいた。

「同級生に見られるのが一番恥ずかしかった」

まだ十代の女の子である。龍野育ちの彼女は心痛かっただろう。源氏名はのぶ栄。

この置屋を束ねるのが検番で、料亭、旅館からの芸者の要請は検番を通して置屋に届くしくみになっていた。如来寺の西隣、現在のポリボックスの辺りが検番跡で、その検番は後に、桶屋町に移った。

客は、醤油会社、素麺会社、造船所などの旦那衆や接待客が多く、「龍野芸者」の評判は、仲々良かったようである。ころ箱をかついだ男衆を従えて、夕方、左づまで座敷に向かう姿や、聚遠亭での花見どきの総踊り、夏の鮎狩りと屋形船での太鼓、三味線の音色、華やかで粋な芸者衆の姿は、この時代、街の到る所で見られた。

井戸誠一著『続　竜野ところどころ』の本に書かれている、興味深い出来事を岡本さんに直接尋ねてみた。

昭和二〇年代の終り、文芸春秋の文化講演で、高見順、吉田健一、檀一雄が龍野に来た。

歓迎の酒宴が聚遠亭で開かれた。当日の余興の出し物は、長唄「橋弁慶」である。岡本さんが弁慶、牛若丸を、現在もお元気なかず子さんが踊った。見せ場、五条の橋の上、弁慶は薙刀で牛若丸に切りかかる。高下駄ばきの牛若丸ははっしとばかり飛び上がった。前記の三文士、市長、龍野の名士淑女の観客は手に汗にぎって舞台に魅入っていた。

と、そのとき、とび下りた牛若丸がものの見事に転倒した。かぶったかつぎを打ち破り、弁慶の薙刀までもへし折った。演者も一瞬自失茫然、観客は「あっ」とばかり口を開いた。

だが、次の瞬間、弁慶と牛若丸は何事もなかったように踊りを続けた。

高見順は独り、膝をぴしぴしたたきながら、「そのとき義経すこしも騒がず」と呪文を唱えるように口ずさんでいた、という記述がある。

このときのことを岡本さんに尋ねると、「よく覚えているけど、そんなにひどかったかいな」という感想だった。

高見順と吉田健一は印象に残っているが、檀一雄は記憶にないとのこと。二次会の料亭での席では、ぶっきら棒に見えた吉田健一が、のぶ栄さんの芸者姿の着物をみて、「いい着物を着ているね」と言った。〈吉田茂の息子なので、吉田健一はやはり目がこえている〉と思ったと岡本さん。女は女性から着物をほめられるより、男性からほめられた方が嬉しいかもしれない。

話を聞いている間に、一人客が入ってきた。何げない言葉のやりとりから、常連さんのようだ。

「お客さんがいる限り店は開けます。冬など一人も来ないときもありますけど」

また一人客が入ってきた。客同志も馴染みのようだ。岡本さんは、桜ぼしやめざしを焼いたり、簡単なつまみを出して、お客さんとおしゃべりを楽しんでいる。

龍野の街全体が映画「寅さん」の雰囲気を醸しているが、人と人とのやりとりも、寅さんワールドである。映画「男はつらいよ　寅次郎夕焼け小焼け」では龍野がロケ地になったが、太地喜和子の芸者、岡田嘉子の華道の先生、宇野重吉の画家、龍野全盛の時代には、現実にそんな人がいたように思える。

（藤岡由美子）

龍野芸者－川遊び

たつの 浦川・十文字川 抒情

臼井　洋志

夜明け、どこからともなく聞こえてくる鐘の音……。

「はて、確か、お寺の鐘の音がしたような……」

除夜の鐘でもあるまいに……と何か不思議な気がしていたものの、その時はあまり気にしていなかった。やんわりとしたその響きを耳にする度に、どこかで朝晩鳴らしていることに気付かされる。

或る日、一体、何回打つのだろうか……と、数えてみたいと思った。

午前六時丁度、ゴーン！と鳴りだす。しばらくして二つめが……。そして三つ……四つ……。何か落語の時そばを演じているような気分……。耳を欹て、五つ六つ……七つ目は……と緊張しながら聴き耳を立てる。果たして、七つは聞こえてこなかった。

フウッ！と息を吐いて六回鳴ったことが分かる。

「そうか、午前六時だから六回鳴らしてるのか」それが、明け六つの鐘の音と分かり、夕刻の六時にも慥六回聞こえるので、それが暮れ六つの鐘の音だと知る。そう気付いた時、どこのお坊さんだか知れないが、何と心配りのある心遊びのできる人かなと龍野の町人の心意気に感心してしまった。正に、抒情感溢れるひとときが、静や静と流れているのである。

或る日、下川原の長老の人たちに集っていただき、龍野の町にまつわるお話を聞かせていただいた。

「十文字川のことについてお話しましょうか」

そう口火を切って話しだされた。何とも興味津々、身を乗り出す思いである。

「十文字川と書いてどじがわと読む。どうしてそう呼ぶようになったか、定かではありませんが、龍野を囲う山々、鶏籠山や的場山などから雨水を集めてドドッ！と流れる。方や、揖保川から引いた浦川が疏水となって町中を流れ西の方へ。その二つの川が交わるところが丁度、梅玉旅館の真ん前。南北を流れるドジ川と東西に流れる浦川とが直角に交わっているのです。ですが、ぶつかりあうことなく互いに流れているのです。ドジ川が上、浦川が下というように、立体交差しているわけですね。当時は交差しているところに延石が敷き詰めてあって、延石と延石との隙間から水がボトボトと落ちていた。今ではもう、コンクリートで工事されているので、そんなことは起きませんがね……」

何とも不可思議な話だと思った。浦川とい

十文字川　橋の手前を浦川が横切っている。

い、ドジ川といい、旧龍野の町を流れている。それもあちこちの家の下を抜けながら、町中で十文字に交差しあって流れているのである。

そういえば、揖保川の東には日飼地先から水を引き込んだ岩見用水が流れている。水は昔から生きていくための要でもあっただろうし、当然、水獲得の為の様々なドラマがこれまで幾度となく繰り広げられてきたことだろう。岩見の井は播磨国風土記にも由来が記されているというから、太古の時代より我田引水の如く、争い事は絶えなかったでしょう。

一方、今年のように雨続きになる天候だと、川の様相は一変し、水は豪雨となって警戒水位を超え、氾濫、洪水となってしまいます。今でこそ、護岸工事やダム工事で川幅を広く取り、水量をある程度まで調節できるようになっています。又、畳堤という独特の創意を橋桁に工夫しています。

畳堤とは、既存の堤防の上に近隣住民の住居の畳をならべて、堤防の嵩上げを行うものである。設置訓練など、日頃から地域住民間の協力や意思疎通が不可欠なため、適用できる場所は限られている……（ウィキペディアより）

畳堤

全国で、この畳堤なるものが、どの程度あるのかしら?と思って調べてみると、

兵庫県龍野市（現たつの市）の揖保川、岐阜県岐阜市の長良川、宮崎県延岡市の五ヶ瀬川の一部で見ることができる。

とあります。龍野は昭和二二年度に時の町長の発案から住民たちの揖保川に寄せる想いを反映させて畳堤が設置されたようです。

昔から揖保川は日本有数の暴れ川だったといいます。

「そう、ボクらの小さい頃には、かつての揖保川と栗栖川とが合流するあたりから引き込まれていた浦川の水は鶏籠山の麓を伝い、それが広がってまるで池のようになっていましたね」と当時の様子を長老たちが語ってくれました。

今ほど治水工事をしていなかった昔は、年に幾度も川が氾濫し、洪水となって田畑や家屋が水浸しになったという。それによって、命を失った人達も数多くいたことでしょう。ただ、それによって、田畑が肥沃になり、昔から美味しいお米が収穫されたのも事実です。それは、粒坐神社や揖保川の名の由来を辿りますと、果たして太古からの大いなる実りを物語っているように思えるのです。

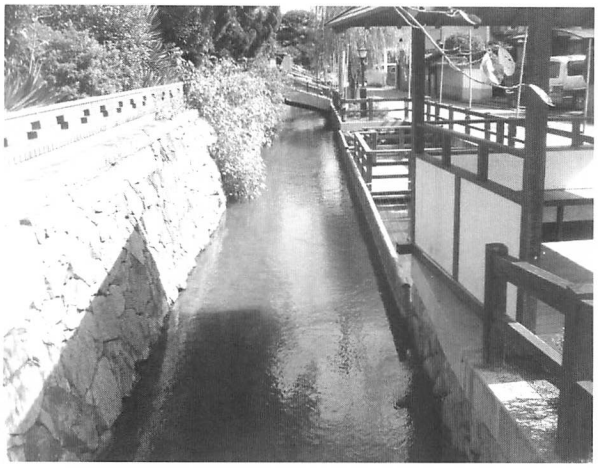
さてさて、揖保川といい、東に西に水を引き込んで浦川、岩見用水を生活のなかに取り込んできた龍野の人々。一歩間違えればイノチを落としかねない水害を招く要素を持つものながら、敢て家の下でもその流れを通しても構わないという事実……

「片岡勧次郎さん、大柄な人でそりゃあ、偉いお人やった。片岡勧次郎さんのお家の下にも浦川が通っていましたね。そう、勧次郎さんの家を抜け出たところが丁度、十文字川と浦川とが交わるところになりますね」

浦川の疏水を眺めていると、大きいのや小さい鮎たちがヒョロヒョロと泳いでいる。時に流れに身を任せて、ホヤホヤ、トロトロと気持ち良さそうに見える。大きい鮎は流れに逆らっても実に素早い動きで目の前を過ぎる。よくよく見ていると、中くらいや小さい鮎たちは疏水の真ん中あたりを行ったり来たり。大きい鮎たちは、両端に近いところをまるで

俺様の通り道だぞい！

とでも言っているような遠慮のない泳ぎ方だ。



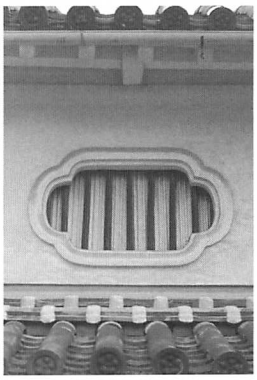
浦川

岩見用水の方は、平成の大改修で近代的な用水路となったようで、魚が棲めるように、魚巣（ぎょそう）等を作ったといいます。眺めていると、やはりおります、おります。小さいのや、大きいのが……何だか、そんな情景に胸がホッとしてきます。そして、人々の揖保川に、浦川に、岩見井に寄せる様々な熱い思いが切々と伝わってくるのです。

※十文字川の名前の由来が、龍野新聞に掲載されていましたので、補足いたします。

十文字川橋の七ｍほど下流で、北から南に流れる十文字川の下を東から西に流れる半田井が潜り抜けています。この二つの流れは「ねじれの位置」にあり、十文字を形づくっています。これが、「どち川」を「十文字川」と書く由来です。（龍野新聞より）

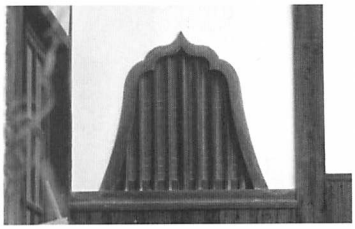
町角 窓



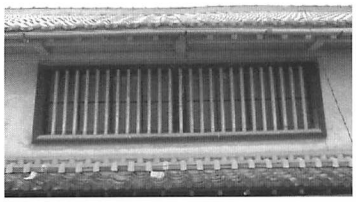
▶上川原　三宅家住宅

▶上川原　カネヰ醤油蔵

▶上霞城　中村家茶室



▶大手　如来寺



▶下川原　たまや

龍野の藍染

臼井　洋志

太古の時代より、人々は生きていく為に様々なものを生みだし、育て、世に広め、やがて消えていく変遷を辿っております。食べること、着るもの、住む為に「これはいい」と思いついたもの、工夫したもの、そして、より多く作ることで、広く流布させてきました。ただ、物も又、ヒトのイノチの如く、永遠に在り続けることはありません。それは、時の権力者、支配者による心によって左右されてきたことでもありましょう。

旧龍野の町並は、（一六三七年～一六五八年）に京極高和（きょうごくたかかず）が出雲より龍野に入封して出来上がったといいます。

石原元吉氏の文献によると、龍野で江戸初期に藍染が営まれていたといいます。下川原の町に紺屋町という旧町名がありますが、そこが結構、龍野の町で藍染が盛んだったところと記しています。

旧町名

江戸時代のはじめに、龍野町で紺屋の多かった町筋はやはり下川原町『紺屋町』だった。玉川の清流を道の真ん中にはさんで紺屋が軒を並べていた。

町並の中央あたりに沿って、清らかな水が走り、みどりの柳が垂れて山下屋の架けた水車がいつも音をたてて廻っていた。江戸期の紺屋町は藍の匂いに暮れる毎日だった。

（『龍野物語』）

※　※　※

紺屋町の当時の様相が目に浮かんできます。サラサラと流れる用水路に柳の木が垂れ、クルクル回る水車の音、そして藍職人たちが、染め上げた木綿布を広げながら玉川の清流で何度も洗っては乾かし洗っては乾かす。あたりは藍の匂いに包まれていた……揖保川から引き入れた浦川（半田井）が、当時、紺屋町を流れ、それを玉川と呼んでいたようです。

紺屋町界隈

町中を流れる用水が人々の生活に大きな役割をしていたのでしょうか。ただ、紺屋町では干場が不便だったようで、その後、門の外・日山の方へその営みは移っていったといいます。

他の様々な文献を見ますと、その頃、龍野だけでなく、山崎町や、西脇など、播磨一帯

に藍染が成されていたという。藍染が広まるきっかけとなったのは、蜂須賀小六が龍野城に入府した折、藍染を奨励した為だといいますから、小六が統治していた一五七〇年代にはすでに営まれていたのでしょう。藍染で知られる四国徳島に阿波藍譜なる本が刊行されています。以下、その中から、抜粋したものです。

「播磨国」は阿波本藍のルーツとの説が有力で、藩祖・蜂須賀家政が播州龍野から天正一三年（一五八五）に移封した時、従来から行われていた藍染を奨励。元和（一六一五～）以降に「播州藍」の移殖を試み、以来、工夫を重ねた結果「阿波藍」が原産地を凌ぐようになった（阿波藍譜）

検証していけば、史実として様々なことが裏付けされてくるのでしょうが、ここでは言及していくことを目的としておりません。あくまでも消えてしまった龍野の藍染の在りし情景にひととき想いを馳せたいと思います。

日本で藍染めが始まったのが、一八〇〇年前。龍野の地では、いつごろ始まったのでしょう。藍は様々な薬効があったといいますから、はじめは怪我や腹痛などカラダを治す為に使われていた……あるいは、藪蚊や虻、蜂などの虫たちから身を守るためにも使われたのかもしれません。

時代によって藍の染め方も変わっていったようです。蓼（すくも）を建て醗酵させていく藍染方法によって本藍が定着し、その頃、それまで天上の品だった木綿布が安価となり、庶民も手にできるようになったことで紺屋を営むところが全国的に広まったといいます。

・・・蓼（すくも）・・・

耳慣れないことばで普段、まずは使うことはないですね。

乾燥させた葉藍を、藍寝床で適量の水をかけては混ぜるという作業を何度も繰り返し醗酵させてできた天然の染料が「すくも」であり、それが天然藍染めの原料となる…

やはり醗酵ですか。日本は醗酵させることで熟成と深い味わいをものに与えてきました。特に食べるものには味噌・醤油・納豆・お酒など伝統食ともなっています。そして藍染めのすくも……水をかけては混ぜるという作業……簡単なことですが、そのタイミングや状況判断がとても難しく、それによって本藍の出来不出来が決まるというくらい大事な作業で、水師と呼ばれる専門職人がいたといいます。大変な重労働でもあったようですね。

現在の紺屋町風景

何か、日本文化の原点をみる思いがしてなりません。

龍野の歩み

◎歴史探訪（一）神々の水争い

◎評伝　三木露風

「写真この一枚」（一）生家と母かた

歴史探訪

一 神々の水争い

岸本　道昭

たつの市揖西町から新宮町にかけて、一般に亀山・城山（きのやま）と呼ばれる自然豊かな山を歩いて楽しむ方が多い。近畿自然歩道として、ある程度の散策道が整備されていることも歓迎される。

ところで、この山の尾根近くに存在する井関三神社奥宮のご神体は巨大な立岩で、まずはそこでびっくりする。そこから北東へ進んでいくと「水争い遺称地」と書かれた看板があり、幅一メートルほどの明らかに人工の土堤が曲線を描きながら続いている場所にたどりつく（写真1）。

狭い痩せ尾根の不思議な光景であるが、実は一三〇〇年も前に繰り広げられた水の取り合いをした場所なのである。しかも争いをしたのは兄と妹だった。水はそのままだと北の新宮町側へ落ちるが、土堤があることによって南の揖西町側へ流れている。北へ流そうとしたのは男の石龍比古命（いわたつひこのみこと）、南へ流そうとしたのは女の石龍売命（いわたつめのみこと）。二人とも伊和大神の子だという。二人は山の峰を踏み崩したり、櫛を挿して堰き止めたり、わざわざ相手の村まで行って別の方向へ水を流したり、実にしつこく争っている。ついに、石龍売命は地下に水道管まで作って密かに南の村へ流したというのである。

写真1　水争い遺称地

この話は『播磨国風土記』に記されている。風土記の記述はそのまま信用できない部分も多い。しかし、現地で照合し、確かに尾根が分水嶺になっているので、この記述は一定の事実を反映したものと考えてよい。詳しくは風土記を読んでいただくとして、私はここに立ったとき、大いなる疑問がわいてきた。

争うほどの水はどこから来るのか？

この場所は山の最高所に近く、東の亀池から流出する水があるけれど、激しく争うほどの水が流れている場所ではないのである。大雨が降ったとしても、流れてしまえばそれで

写真2　亀池

堰き止めて造った人工の池である可能性が出てくる（写真2）。

城山山頂付近にある亀池が、古代の人口池と考えられたことはないが、私は考えてもよいと思うようになった。いや確信した。ましてや、城山は古代山城の可能性も指摘されている山である。亀池の南の尾根には門の礎石が二つ知られており、西日本各地で確認されている古代山城の門礎そっくりである。城に用水はつきものであるし、当時にあっても農業用水の確保、水利権の掌握は重大な関心事であったはずである。

古代の土木工事は、行基の事跡にも伝承されているが、多くの古墳の造営は高度な技術を要する大土木工事である。また河内での狭山池の造営、古市大溝の開削なども古代にさかのぼることが考古学的に確認されている。つまり、山上の亀池が古代の人口池であるという事実を、もしかしたら風土記が間接的に記してくれているのかもしれないのである。

確かに風土記は、池の造営記事などは記してはいない。しかしそれを言うなら、考古学的に存在がほぼ確かめられている城や寺の造営、道や駅の整備工事、役所のことなどの重大事もまったく書いていない。『播磨国風土記』の特徴は官命に忠実で、地名に関わることなどは詳しく書いている。しかし、政治的なことや行政に関わることはほとんど書いていないのである。こうしたことから、私は亀池が古代にさかのぼる人工池であった可能性が高い、と考えている。

水争いの記事は、出水里の地名由来であることから、南側の村落首長である石龍売命が池の造営に関与した可能性は高い。ただ、亀池の現在の堤防が古代のままとは思えないし、水争いの地にある土堤がいつごろ造られたものかも調べてみないとわからない。

しかし、このように水争いの遺称地を実際に特定できること、訪れて観察することによって、風土記をもとにしながら、風土記に書かれていない歴史の重要事件を推察することができるのではないだろうか。

揖保川下流域には多くの遺跡や歴史文化遺産、歴史資料が豊富に残されている。少しずつでもそれらをひも解き、訪ね歩きながら奥行きあるこの地域の歴史を考えることは実に楽しく、ワクワクすることである。

（たつの市教育委員会文化財課課長補佐）

おしまいである。そこで考えたのは、これは自然の流水を争ったものではなく、実は池の水を争ったのではないか、ということである。つまり、そこまでしつこく争う理由とは、溜池の権益争いを記したものではないか？ということである。すると亀池は、山上の窪地を

評伝 三木露風

「写真この一枚」㊀ 生家と母カタ

和田 典子

鶏籠山を眺めながら、龍野大橋を渡り、突き当たりを右にとり、ゆるやかな坂を登ると、露風の母校龍野小学校（当時は龍野尋常小学校）がある。そして、道は検察庁の前にでるが、その対角の白壁の家が露風の生家、二四番屋敷（現：たつの市中霞城五七番地）である。最近、たつの市に買い取られ、保存・公開の準備がされている。どのような形で公開されるのか楽しみだが、それに先立ち内部が関係者に公開された。明治初期に建てられたと推測される家屋は、木造一二八平方メートル。一九三九年頃人手に渡り、二〇〇八年までは住宅として使用されていた。内部は大幅に改装されたが、柱や梁や天井板などは、建築当時の姿が残っているという。

露風生家

三木露風は、明治二二（一八八九）年六月二三日、兵庫県揖西郡龍野町ノ内龍野町八番屋敷（現：たつの市龍野町上霞城一〇一番地一）に、父三木節次郎（二三歳）、母カタ（一八歳）の長男として生まれた。本名は操という。八番屋敷は、三木家の本家である三木制屋敷の住所で、次男夫婦は二四番屋敷に新宅を構えた。

三木家は、藩政時代は寺社奉行の家であり、祖父制は、奉行、初代龍野町長、九十四銀行の頭取を勤めた。その名家三木家の次男が節次郎で、師範学校を卒業後、一時期裁判所に勤務していたが、九十四銀行に移った。

母カタは、鳥取藩家老和田家の次女で、後に看護婦・女性解放運動家として活躍した碧川カタである。カタは優しく聡明な女性であり、短歌を作るなど文学にも明るかったという。聡明な母の存在が、露風の文学形成に与えた影響は大きい。露風自身が、

私が文学に親しんだ初めは、五歳の頃、母が家庭読本を読んで聞かせて呉れた時で、其印象が今に残ってゐる。

『我が歩める道』

母は、私が幼年の頃、私に、長い詩を歌って聞かせて呉れた。其れが子守唄であった。私は、母が、其の長い詩を度び度び歌って呉れた事を覚えてゐる。其れを聞くと、何とも言へず、懐しい気がした。

母は、宗教心の篤い人であった。そして、詩や歌の嗜好のある人であった。絵を描いて、それを見せて、子供の私を遊ばせて呉れる事もあった。

『三木露風詩集』第一巻

と、記している。母親が読んでくれた読本や、歌ってくれた子守唄や長い詩が、露風の豊かな言語形成の基礎となったことが窺える。さらに、母親は、詩や歌の嗜好のある人であり、絵を描いて、それを見せて、子供の私を遊ばせてくれたという。童謡「私の母さま」には、

わたしの、
母さま、
よい母さまよ。
いつも、にこにこ、
恵みます

あか兒のときには、
子守唄、
「ねん、ねん、おころり、」
ねかしつけ。

少し、大きく、
なったとき、
本よみ、絵をかき、
あそばせた。

第四連略『小鳥の友』

と、歌う。

両親は故あって、露風が七歳の時（明治二八年二月）に離婚したため、その後、露風は祖父制に引き取られ養育された。

露風にとっては、生後わずか六年弱しか住めなかった家ではあるが、一家が揃っていた唯一の至福の時間を過ごした思い出の家である。父は留守がちではあったが、聡明な母、優しいねえや、二つ違いの乳飲み子の弟勉がいた。

勉の泣き声や、母やねえやのあやす声、乳飲み子の弟を抱き上げてキスをする母のしぐさ……すべてが一枚の絵となって露風の心に刻み込まれていたのだった。

『幻の田園』所収の「湖水の印象」では、湖水の面に映し出された情景が次のように描かれている。

揺籠に稚児はめざめ…略…
母は、いまその手を
蒼白きその手をのべて
くちづけする横顔
時ははたと休み、稚児の笑ひもせず。

子どもが目覚めた瞬間の母子の様子を捉えている。子どものいなかった露風夫婦であったから、この情景は、遠く幼い日の印象であったに違いない。

そして、生家の庭に来る小鳥の鳴き声や木々のざわめきや、草花の香り、そして柔らかい光や影の移ろいさえも、露風は記憶していた。それらの情景は、幻のように立ち現れ、詩や童謡のモチーフとなっていく。

『真珠島』所収の童謡「静かな日」の第二連・三連には、

若葉の匂ひ、
日に蒸せて、
栗の花散る、
しづかさよ。

父は在さず、
母は縫ふ、
白くすゞしき、
単物。

とあり、夏の日の午後の情景を捉えている。不在の父の為に、母は「白くすゞしき単物」の着物を縫っている。広げられた反物を縫う母の清楚な姿の向こうでは、白い栗の花が静かに散っている。栗の花は、全体に長い穂状に見えるのだが、それが雄花で、その根元に雌花がひっそりと咲く。露風にとっての母は、寂しい白のイメージの人であったのだろう。母親の幸薄い忍従の日々を、露風は、幼いながらにも感じ取っていたのかもしれない。

露風は、夏の日の午後、「暑からぬ、まばゆからぬ」光の中に幻想を見続けていた。その時間帯が一番好きだという。それは、生家で過ごした至福の時間であったのかもしれない。

（近畿医療福祉大学教授）

龍野を歩く

◎「寅次郎夕やけ小焼け」の思い出

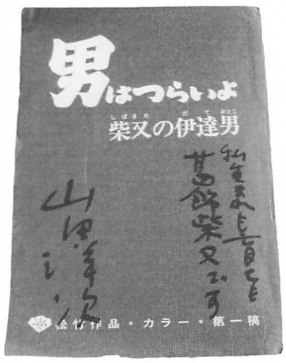
◎震災と町並

◎龍野を歩こう（1）―龍野観光コース

「寅次郎夕焼け小焼け」の思い出

榮藤　孝

山田洋次監督の「男はつらいよ　寅さんシリーズ」は一九六八年から一九九五年まで、映画としては四八本とられています。龍野がロケ地となった「寅次郎夕焼け小焼け」は一九七六年の作品で、第一七作目なんです。最初のタイトルは「男はつらいよ柴又の伊達男」で台本にもそうかかれていたんです。ロケ中に旭橋から見た夕焼けがきれいで、急遽「夕焼け小焼け」に変わったのです。



男はつらいよ脚本表紙

この映画ができたのは、本当に偶然なんですよ。山田監督、渥美清さん、高羽キャメラマン、美術担当のスタッフが、次の映画の候補地を捜すロケーションハンティング、通称ロケハンと言っていますけど、そのために四国の大洲に向かっていたときです。龍野にいた私に監督から電話がかかってきたんです。

「君のふるさと、確か、小豆島だったな」

「いえ、龍野です。新幹線駅では姫路か相生で降りて二、三〇分のところです」

「そうか、ちょっと寄るよ」

というわけで、私が相生駅に車で迎えに行ったんです。三月の初め頃だったと思います。

私は大学を卒業してから、前田陽一さんの紹介もあって、松竹に入り俳優をめざしていました。中村登、山田洋次、前田陽一諸監督の映画で使ってもらってました。当時は大部屋俳優でしたけど。渥美ちゃん（渥美清）とは住んでいる所が近かったので、彼をよく車で送り迎えして可愛がってもらってました。苦労人でよく気がつく人でした。

私が二九歳のときに親父がなくなりまして、俳優を断念して龍野へ帰ってきたんです。渥美ちゃんはいつも言っていましたね。

「映画はやくざな仕事よ。国に帰んな」

そんな訳でスタッフの皆さんと親しかったもんで、龍野を案内することになったんです。二号線の相生から揖西、龍野の日山のルートで龍野に入りました。山田監督の好みがわかっていたのでそうしたのです。

龍野高校前、日山に車が入ってゆくと、皆が騒ぎ出したんです。

「いい街だなあ。時代劇でもいけそうだ」

それで、歩いて街をもっとゆっくり見たいと言い出したんです。街中ほぼ全部案内しました。

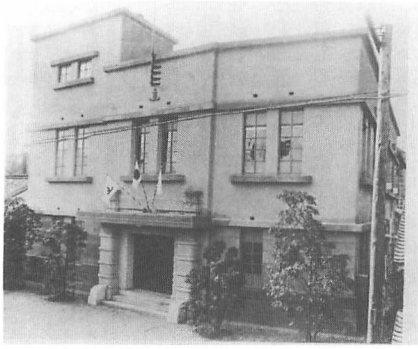
それから大洲行きはやめて、とんとん拍子に龍野をロケ地にと決まったわけです。大洲は何作か後でロケ地になりましたけどね。龍野に決めて、山田さんは前田陽一さんに一言その旨を言われてましたね。

これが三月の話で、五月二四日には脚本もできて、実写の先発隊がロケにきたわけです。三、四日遅れて、監督、俳優がきて、六日間ほどの撮影でしたね。山田監督、宇野重吉、渥美清、岡田嘉子、高羽キャメラマン、美術担当は「藤月荘」、太地喜和子、寺尾聡、桜井センリは「梅玉」、スタッフは「双葉旅館」に泊っての撮影でした。

私は宿の手配から、撮影場所の交渉、エキストラの手配、その他皆さんの要望など、ロケがスムーズに運ぶよう、いろいろ走りまわ

りました。私は市役所に勤務する運転手役で出ていますので、車の運転も実際にしていたわけです。龍野市長、当時は横尾市長でしたが、本物の市長の車を数日間借りました。

市役所は今の中央公民館、宴会シーンは梅玉さん、宇野重吉の初恋の人、岡田嘉子の家は、動物園下の大山さん宅です。土塀と玄関など、雰囲気がある家でしたが、今は空地ですね。これら撮影は表だけで、内部のシーンは全てセットなんです。やはり映画はテレビと違って照明その他大掛りで、セットじゃないとできません。



旧龍野市役所

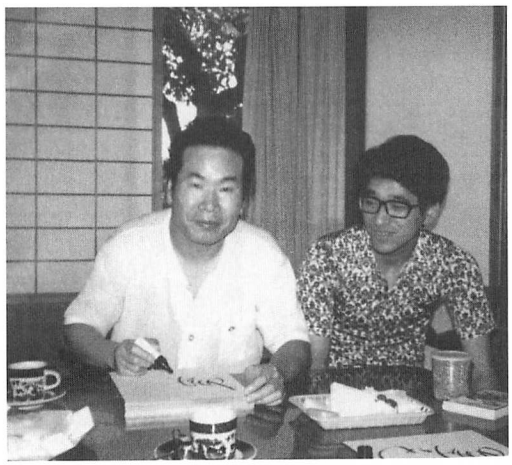
山田監督はとに角頭のいい人でした。物の見方が普通じゃないというか、ぬきんでているというか、私にもらったあの薄ぺらの台本が、あんな素晴らしい映画になったのでびっくりしました。最後のシーンになった、赤とんぼ荘から見た龍野の屋根と一本の細い道がかもしだす美しさ、芸者ぼたんの家の路地と小さな川、地元の人でも見のがす場所が、映画のわくの中に収まったときの美しさ、感動しました。

ヒガシマルさんのマークが入った煙突とか、私の家は当時川西でパチンコ店と上階は喫茶店をしていたのですが、それをチラッと入れたり、あまりそんなことをしない人なので、他人から見ればわからないことなんですけど、気持ちをさりげなく伝える人ですね。

山田洋次監督－榮藤宅前

渥美さんは出番以外、藤月荘にこもってました。朝食のコーヒーとサンドイッチは、私とこの喫茶店から弟が毎朝運んでいましたね。

太地喜和子さんはとにかく明るい。ぼたん役が地でいける人でした。お酒が好きで強く、梅玉さんで寺尾さんや桜井さんと毎晩宴会してたんじゃないですか。宇野重吉さんは静かな感じですが、存在感がありましたね。役の（池ノ内青観）、相生の池ノ内という地名からとったことに最近気づきました。



渥美清と栄藤守（弟）

川で水遊びする子供たちは、小宅小の子供たちで、校長先生に頼みに行きました。円光寺さんの裏から木下薬局の方向にカメラを構え、高校生や大人が通るシーンとか、晴風さんの所を芸者が通るシーンは、エキストラを頼んでいます。芸者さんは元芸者さんに頼んで衣裳やら大変でした。

「夕焼け小焼け」がシリーズの中でもベストスリーに入っているのは嬉しいです。

（談・藤岡由美子記）

震災と町並み

長坂　泰成

郷土史を読むと、その中に書かれている町並みそれぞれが歴史をもっており、その歴史が人の心を育てるように思えてなりません。私は、それぞれのまちの歴史ある町並みが好きで、特に国が選定した日本を代表する美しい町並み「国の重要伝統的建造物群保存地区」をよく訪れます。

この二〇年の間、全国的に各地域の歴史と文化に育まれた町並みが、人為的なことで音をたてて崩れるような感覚で無くなっていくように思えてなりませんでした。

私は、三月一一日に発生した東日本大震災四〇日後の四月二二日（土）から五月一日（日）までの一〇日間の日程で、兵庫県たつの市から派遣され、宮城県南三陸町に行政支援に行きました。

東日本大震災で犠牲になられた方に深く哀悼の意を表明します。また、被災地の皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、日本だけではなく世界の人々からの災害復旧・復興支援を得て、一日も早い平穏な生活に復帰されますことを心からお祈りします。

公用車を交代で運転しながら片道一，〇〇〇㎞の行程でした。東北に入り山元町、角田市で宿泊して、仙台市そして南三陸町と北上しました。現地に到着し、海から山までの三六〇度の風景が瓦礫化しており、脳が悲鳴を上げる程の衝撃を受けました。この震災により、住む人々の営みが一瞬で「無」になっているのでした。先祖代々受け継がれてきた財産である文化遺産、自然遺産等も失われたのです。

南三陸町志津川地区

まちには、その風景をはじめ、地域の誰もが知っている神社やお寺、時を刻みずっとまちを見守ってきた巨木、白壁の土蔵、歴史ある木造校舎や小さなお地蔵さん等たくさんの財産があります。先代、いや何代も前から住まいする人々にとって、普段何気なく見ている風景が、受け継いできた心の「ほっと♥ステーション」となり、心が落ち着くコミュニケーションの「場」でもあります。それは全てが、住まいするみなさんの歴史自身で、「まちのＤＮＡ」であるからだと私は思います。そして、そのＤＮＡはまちづくりの行事を通して新しい住人にも伝わっていることです。

南三陸町の年配の女性達との会話の中で気がついたことがありました。

「あの神社の桜の下では、よく花見や盆踊りをしたが、今年はねぇ……。」

など、思い出を語る中に、必ず、町の何処々々

で何々をしたのだが、と行事と町の風景が語られるのです。

私は「普通の暮らしの中で、まちを語る思い出が生きる力」であると強く思いました。

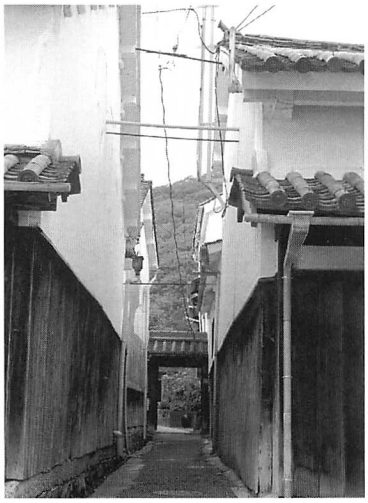
人は、「思い出とともに語れるまちの財産を保存し、活用すること」が必要ではないでしょうか。

先に述べましたように、国の重要伝統的建造物群保存地区を訪れますと、龍野の町は日本中のどの保存地区にも負けない美しい町並みがあります。

昭和六〇年の第八回全国町並みゼミは龍野で開催され、まち並みを保存する機運が生まれましたが成就せず、昭和六三年に国の重要伝統的建造物群保存地区の選定に至りませんでした。それは、この龍野のまちが住まいする人たちにとって、あたりまえの故郷龍野であり、保存する町並みである認識がなかったからではないでしょうか。

それからの約一〇年間、龍野町では、伝統的建造物を保存しながら活用する「オータムフェスティバル」、「町ぢゅう美術館」、「龍野ひなまつり」など年間を通して活動をしています。

また、住まいする者の世代交代が進み、[空家⇩雨漏り⇩近所からの苦情⇩解体⇩空家⇩販売⇩未購入⇩空地]という図式ができ、この五年間で中心地空洞化に拍車がかかっています。



大手

中霞城

浦川筋

そこで、龍野地区まちづくり協議会では、本年度新たに伝建部会と広報部会を立ち上げ、広報部は広く住民にPRし共にまちづくりをするために活動しています。兵庫県文化財室やたつの市町並み対策室の指導のもとに、伝建部会では、重要伝統的建造物群保存に向けて取り組んでいます。（萩市・篠山市の協力や八女市都市計画課長北島様の御尽力によるQ&Aを活用した「篠山市への先進地視察研修」「龍野地区町並み保存全世帯アンケート」の実施）

最後に、私が半年前に東日本大震災の現場を我が眼で見て、そして、龍野を見つめ直して感じたことがあります。

故郷を想い、まちを見つめ直そう！

古い町並みは、そのまちのパワースポットである。

普通の暮らしの中で、まちを語る思い出に生きる力となるものがある。

まちの財産を活かしながら保存しよう！

まちが未来に繋がる力となる。

龍野を歩こう

『龍野を歩こう』（ドラゴンウォーカーズ〈代表石原正幸氏〉作成）より転載

龍野に住まう

◎「日山ごはん」

日山ごはん

宮崎　宏興

古い町並みにある古民家を活用して営業されている定食屋『日山ごはん』。古民家の風情を残しつつ、地域住民の皆さまの食事と憩いの場となっている。

店内は、古民家ならではの落ち着いた雰囲気と、縁側から見える庭園。四季折々の景色と風の匂いを感じられる空間になっている。緩やかに流れる時間と何故か懐かしさを感じる食事が気軽に味わえる魅力がある。

そんな『日山ごはん』の厨房を預かる調理師の香山美和さんは、「普通の民家だったところを、きれいに片づけたり、修繕したりするところから始まりました。皆でどうすればお客様が来て下さるかを考えながら今に至っています。そんな『日山ごはん』が日々成長できていることがうれしいです。

食べに来て下さる皆様が、〔食べて・幸せ〕を感じていただけるお手伝いができればいいなと思っています。二回三回とお馴染みのお客様が来て下さるたびとてもうれしくなります。これからも、もっとたくさんの方々との、つながりができていくことをとても楽しみにしています。」と生き生きと働く姿が印象的だ。

また、この『日山ごはん』は、障害を持つ方々の就職訓練と就労支援をおこなう『ワークス龍野』としても活動している。いつも笑顔で接客にあたる作業療法士の蜂谷亮子さんは、「私は、作業療法という仕事を通して、社会で暮らすために必要となる、身のまわりのこと・就労や学業・余暇や社会交流に関するさまざまな能力と技能を身につけるためのリハビリテーションを行っています。日山で働くようになって一番印象的なことは、まちの人たちが、いつも笑顔で気持ちよくあいさつをして下さることです。〔今日もよぅガンバっとうなぁ〕〔今日はたくさん人（お客様）入っとぅなぁ〕など声をかけて下さることがうれしいです。また、障害を持つ方々が、あたりまえに働きながら、地域住民の方々とも、あたりまえに交流している姿が見られることもうれしく感じています。老若男女や障害の

有無を問わず、たくさんの地域の方々との出会いや協働による地域づくりのために、皆で取り組める作業ができることの魅力を感じています。」と語ってくれた。

また、就労支援員としてジョブコーチ（職場適応援助）にあたる三宅康貴さんは、「障害を持つ方々にとっての就職はまだまだ厳しいのが現状。〔働きたい！〕と想いのある方の強みと弱みを把握し、円滑に就労できるよう、職場内外の支援環境を整えたり、求職者・企業側の双方に必要な訓練やアドバイスをする役割を担っています。最近では、製造業・サービス業・介護業・清掃業など、さまざまな事業所に就職して働く方も多くなり、『日山ごはん／ワークス龍野』における活動の成果が出てきています。今後は、より多くの事業所の皆さまと連携し、あたりまえに働ける地域づくりに取り組んでいきたいと思っています。」と語ってくれた。精神保健福祉士でもある三宅さんは、就職活動に悩む人たちへの相談支援を通じて障害を持つ方々の社会生活を支援している。

日山ごはんでは、昼の定食とともに、近隣への配達も行っている（配達地域：日山・川原町・下川原・本町・上霞城・大手・立町・福の神）。今後は、足腰の弱いご高齢者様用のテーブルセットの増量や、小さなお子様連れのママ友さん用のキッズスペースを用意していく予定。

【営業日時】月曜～金曜（土日祝休）一一時三〇分～一四時〇〇分（ラストオーダー一三時三〇分）

【メニュー】日替わり定食五〇〇円・紫黒米入りハンバーク定食七八〇円・魚定食六五〇円・コロッケ定食六〇〇円・牛すじカレー六〇〇円・ふわとろオムライス五〇〇円・日山定食四五〇円・その他、季節メニューもいろいろ。

【お問合せ先】ワークス龍野／日山ごはん（TEL・FAX共通〇七九一-六三-二一八七）たつの市龍野町日山三四一-二

【ワークス龍野／日山ごはんは、特定非営利活動法人いねいぶるが運営しております】

啓蟄塾の設立とお願い

平成二三年、この国は東日本大震災を経験しました。

近代文明の象徴とされ、産業を支えた電気を作る原子力発電所がメルトダウンし、汚染物質が放出され、大地を汚染しました。

震災復興について、阪神淡路大震災が起きた平成七年はまだ日本の経済に力があったのではないでしょうか。また都市部での災害ということもあり、一六年を経た今では震災の爪跡を見ることはありませんが、今回の東日本大震災の復興はどうなるのでしょう。

戦後、経済の成長こそが国の発展であり進むべき道、大量生産・大量消費こそ豊かさの象徴としてきたこれまでの考え方を見直す必要に迫られているといえないでしょうか。

また、人々の生活はますます都市に集中し、農地は耕作放棄され、地方の集落は限界集落となるなど、多くの地方はますます切り捨てられ見捨てられようとしています。

龍野もかつては市の機能のすべてがこの龍野（川西地区）にあり古くから栄えましたが、現在は営業する商店は少なくなり、昼間の人通りも少なく、まちとしては超高齢化社会となり、かつてに比べまちの機能が著しく低下しているといえます。

このままではコミュニティがますます崩壊し、さらなる空洞化を引き起こすことが心配されます。

私たちが『啓蟄塾』を立ち上げたのは、この龍野という場所でみんなが幸せに生活できる場所を創出できないだろうか、そのために私たちに何かができないだろうかと考えたからです。

今日、働き盛りとされる若者などが、悩み、精神を病むなどして社会から排除されているといった問題があります。

今日の過酷な生き残り競争や成果を急ぎすぎる社会で、一部の人が自分のペースで生活ができなくなり、さらに精神を病むなどして働くことができなくなり、結果として労働人口としてカウントされず社会から見えなくなってしまっているように思います。こういった点もこれまでの成長優先社会の影の部分といえないでしょうか。

『福祉』という言葉は高齢者福祉、障害者福祉など、限られたところで使われるイメージがありますが、そもそも福祉とは幸福という意味で、社会の構成員に等しくもたらされるべき幸福という意味です。

啓蟄塾はあらゆる人が龍野というまちで幸せに生きることができる環境の創出に寄与したいと考えます。

啓蟄塾の活動にご理解とご支援賜りますようお願い申し上げます。

（金治　基勝）

啓蟄塾の組織については、「県民ボランタリー活動の広場・ひょうごNPO法人情報公開サイト」をご覧ください。

編集後記

多くの方々のご協力で創刊号の発刊に至りました。

長時間のインタビューに応じ何度も原稿に目を通していただきました淺井良平氏と乾太氏、ご多用のなかご執筆をいただきました岸本道昭氏と和田典子氏、故前田陽一氏の「龍野を想う」の転載にご配慮いただきましたご遺族や「商工龍野」・「龍野春秋」の関係者、「龍野を歩こう」の転載をご承諾くださいました石原正幸氏に、ここに記してお礼申し上げます。

昨年は、水の力を思い知らされた年でした。ここでも図らずも水に関わる話が多くなりました。人間と水との関わりの深さが自ずから現れたものでしょうか。

水の被害からの復興を願いながら、自然と人間との関係も含め、いろいろな面から人間のあり方、生活の仕方を見直したいものです。

※印刷の直前に淺井良平氏の訃報に接しました。ご遺徳を偲び、謹んでお悔やみ申し上げます。（室井）

※裏表紙写真：圓光寺山門（本町）
元宝鐘寺山門（門ノ外）を移築

郷土誌「ふるさと龍野」創刊号
平成二十四年一月十一日発行

編集人　室井美千博
発行人　原田　研一
発行所　ＮＰＯ法人　啓塾塾
〒六七九-四一六六
兵庫県たつの市龍野町川原町一三三番地
電話〇七九一（六二）〇三七三
e-mail　kenichi510@i.softbank.jp

印刷所　株式会社協和印刷
〒六七九-四三一三
兵庫県たつの市新宮町新宮一〇六四番地
電話〇七九一（七五）〇一一九

発行／NPO法人 啓蟄塾